

平成25年度

外部評価報告書

平成26年3月

小山工業高等専門学校



## 目 次

### ま え が き

|                                      |    |
|--------------------------------------|----|
| 1. 平成25年度外部評価委員会委員名簿                 | 1  |
| 2. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価概要            | 2  |
| 3. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会開催要領       | 3  |
| 4. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価に係る事前打合せ会開催要領 | 4  |
| 5. 小山工業高等専門学校外部評価委員会規程               | 5  |
| 6. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会議事録        | 6  |
| 7. 外部評価用「評価シート」集計結果                  | 38 |
| 参考資料「小山高専の沿革（概略）」                    | 54 |

※参考資料については、外部評価委員用説明資料の一部を参考として掲載した。

### む す び

## まえがき

昭和36年に創設された高等専門学校制度は、一昨年、50周年を迎えました。明確な教育目的を持ち、15才からという早期の、また5年間という比較的長期の体験重視型の専門教育は、実践的・創造的技術者を養成するうえで高い教育効果をあげ、各方面から高く評価されてきました。我が校も昭和40年の創設以来これまでに7千数百名の卒業生を送り出し、我が国産業の振興に大きな役割を果たしています。

しかし、近年の15歳人口の減少、小中学生の理系科目への関心の薄れ、卒業後の大学等への進学率の高まりなどの進路の多様化、さらには我が国社会経済の不安定など、我が校を含む高等専門学校を巡る状況は大きく変化してきており、これらの現状や変化にともなう諸課題に適切に対応し、教育・研究の質を向上させて、社会の負託に応える努力がいつそう求められています。特に地域社会や産業のコアとしての役割に期待が高まっています。

このため、本校では、中期計画・年度計画等を定め、様々な観点からの改善・強化を続けています。たとえば、複眼的視野を持つ開発型技術者の育成をめざして専攻科を3専攻から1専攻への改組し、また平成25年度には電気情報工学科と電子制御工学科の高度化再編により電気電子創造工学科を創設しました。この間、特色ある教育・地域貢献プログラムとしての「最先端技術を理解するための学際カリキュラム策定」や、情報発信・地域貢献のコアとしての「サテライト・キャンパスの設置」、さらに地域連携共同開発センターの高度化改修と小山高専地域連携協力会の設立等、教育プログラムの充実と産学官連携機能の強化に精力的に取り組んできました。広報誌やHPの刷新による広報戦略強化などもその一環です。

本校が社会から要請される役割にさらに適切に応えるには、本校の教育研究や地域貢献活動等学校運営全般について自己点検・評価を定期的に行い、同時に外部評価を受けて、改革・改善のサイクルを回し続けることが重要です。このため本校では学識者、地域産業界代表、地方自治体代表、後援会代表等からなる「小山工業高等専門学校外部評価委員会」を設け、本校の教育研究活動や学校運営に関する率直な評価やご意見を定期的・継続的にいただいているところです。

本外部評価報告書は、本校が平成25年11月にまとめた「自己点検評価報告書(平成22年度～平成24年度)」をもとに、平成25年11月から平成26年1月に外部評価委員の方々に調査・審査いただき、忌慢のない評価・ご意見を伺ったものを取り纏めたものです。この外部評価委員会においていただきました評価・ご意見を、私どもは真摯に受け止め、今後の本校の教育研究活動・地域貢献活動の改善・充実に生かし、よりいつそう社会からの期待に応えられる学校を目指していきたいと考えています。

外部評価委員の皆様におかれましては、ご多忙中にもかかわらず本校の自己点検評価書の審査、評価委員会へのご出席など多大なご尽力をいただき、教職員を代表して心より御礼申し上げます。今後も本校の教育活動や学校運営に関しまして、変わらぬご指導・助言を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年3月

小山工業高等専門学校長  
荊谷 勇雅

1. 平成25年度外部評価委員会委員名簿

| (氏名) | (現職)                         |
|------|------------------------------|
| 太田正廣 | 関東職業能力開発大学校 校長               |
| 大森武男 | 小山商工会議所 会頭                   |
| 酒井一行 | 小山市教育委員会 教育長                 |
| 花田康行 | 栃木県産業技術センター 所長               |
| 宮嶋 誠 | 小山市 副市長                      |
| 横田和隆 | 宇都宮大学<br>工学部附属ものづくり創成工学センター長 |
| 吉澤弘樹 | 小山工業高等専門学校後援会 会長             |

(50音順)

## 2. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価概要

本校における外部有識者等による外部評価は、平成12年度に初めて外部評価委員会として実施して以降、本年度で5回目であり、今回は、平成22年度から平成24年度までの3年間の自己点検評価をまとめた自己点検評価報告書（平成25年11月発行）に基づき実施した。

外部評価委員の委嘱（任期2年）にあたっては、本校と深い係わりを持つ地域の教育機関から2名、行政機関から2名、産業界から1名、県から1名、本校後援会から1名の有識者に就任をお願いした（P.1 外部評価委員会委員名簿参照）。

ご就任後各委員には、本委員会の開催に先立ち、平成25年11月26日に外部評価に係る事前打合会を開催し、自己点検評価報告書及び同概要版による説明及び意見交換を行い、83項目に及ぶ評価シートへの記入方を依頼した。

以上の経緯を経て平成26年1月9日、平成25年度外部評価委員会を開催した（P.3 委員会開催要領参照）。当日は外部評価委員7名全員にご出席いただき、席上、関東職業能力開発大学校太田校長を互選により委員長に選出した。その後本校に対するヒアリングによる質疑応答等に基づき評価が行われ、最後に太田委員長から総合的な講評をいただいた（P.6議事録参照）。なお質疑応答は、各評価項目に対し、各委員から提出された外部評価用「評価シート」を用いて行われた（P.38 外部評価用「評価シート」集計結果参照）。

各委員にはご多忙にもかかわらず、短期間のうちに本校の実情をご理解いただき、各評価項目について、それぞれご専門のお立場から、評価、指摘、アドバイスをいただいた。

本校では、今回の外部評価委員会の評価結果を受け、教育・研究・学校運営の質の向上に向け効果的な改善を進めていく所存である。

### 3. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会開催要領

#### I 日時及び場所

平成26年1月9日(木) 14:00～  
小山工業高等専門学校管理棟1階中会議室

#### II 構成員

##### 外部評価委員会委員

|        |                          |
|--------|--------------------------|
| 太田 正 廣 | 関東職業能力開発大学校長             |
| 大森 武 男 | 小山商工会議所会頭                |
| 酒井 一 行 | 小山市教育委員会教育長              |
| 花田 康 行 | 栃木県産業技術センター所長            |
| 宮 嶋 誠  | 小山市副市長                   |
| 横田 和 隆 | 宇都宮大学工学部附属ものづくり創成工学センター長 |
| 吉澤 弘 樹 | 小山工業高等専門学校後援会会長          |

(50音順)

##### 本 校

|         |                             |
|---------|-----------------------------|
| 荻谷 勇 雅  | 校長                          |
| 糸井 康 彦  | 副校長(総務主事)                   |
| 小堀 康 功  | 副校長(教務主事)                   |
| 小林 幸 夫  | 副校長(学生主事)                   |
| 川上 勝 弥  | 副校長(寮務主事) (代理:鹿野 文久(寮務主事補)) |
| 亀山 雅 之  | 専攻科長                        |
| 伊澤 悟    | 地域連携共同開発センター長               |
| 南 斉 清 巳 | 自己点検評価専門委員会委員長              |
| 加藤 敏 明  | 事務部長                        |
| 櫻井 孝 幸  | 総務課長                        |
| 須磨 宏 信  | 学生課長                        |

#### III 次第

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 外部評価委員紹介
4. 本校出席者紹介
5. 委員長選出
6. 質疑応答
7. 総合評価取りまとめ(休憩)
8. 講評
9. 校長謝辞
10. 閉会

#### IV 配付資料

- ・外部評価委員会規程
- ・外部評価委員会委員名簿
- ・外部評価委員毎の評価点一覧(外部評価用「評価シート」)

#### 4. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価に係る事前打合せ会開催要領

##### I 日時及び場所

平成25年11月26日(火) 14:00～  
小山工業高等専門学校管理棟1階中会議室

##### II 出席者

###### 外部評価委員会委員

|      |                 |
|------|-----------------|
| 太田正廣 | 関東職業能力開発大学校長    |
| 大森武男 | 小山商工会議所会頭       |
| 酒井一行 | 小山市教育委員会教育長     |
| 花田康行 | 栃木県産業技術センター所長   |
| 吉澤弘樹 | 小山工業高等専門学校後援会会長 |

(50音順)

###### 本校

|      |                |
|------|----------------|
| 荻谷勇雅 | 校長             |
| 糸井康彦 | 副校長(総務主事)      |
| 小堀康功 | 副校長(教務主事)      |
| 小林幸夫 | 副校長(学生主事)      |
| 川上勝弥 | 副校長(寮務主事)      |
| 伊澤悟  | 地域連携共同開発センター長  |
| 南斉清巳 | 自己点検評価専門委員会委員長 |
| 加藤敏明 | 事務部長           |
| 櫻井孝幸 | 総務課長           |
| 須磨宏信 | 学生課長           |

##### III 次第

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 外部評価について
4. 外部評価委員紹介
5. 本校出席者紹介
6. 本校概要説明
7. 自己点検評価報告書及び評価シートの説明
8. 質疑応答
9. 閉会

##### IV 配付資料

- ・外部評価委員会規程
- ・外部評価委員会委員名簿
- ・小山高専概要説明資料
- ・自己点検評価報告書・概要版・外部評価用「評価シート(自己点検評価)」
- ・外部評価用「評価シート」のご記入について
- ・学校要覧(2013)
- ・小山高専研究シーズ集(2013)
- ・小山高専サテライト・キャンパスご案内
- ・先進的キャリア教育推進室
- ・小山高専地域連携協力会
- ・学生便覧(平成25年度)
- ・学校案内(2013)
- ・小山高専 Quarterly
- ・平成22年度外部評価報告書

## 5. 小山工業高等専門学校外部評価委員会規程

制 定 平成16年12月1日

最終改正 平成18年 4月1日

### (目的)

第1条 この規程は、小山工業高等専門学校（以下「本校」という。）の教育研究活動及び学校運営全般の改善に資することを目的として学外有識者による評価を実施するため、小山工業高等専門学校外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置き、必要な事項を定めるものとする。

### (組織)

第2条 委員会は、委員若干名を以て組織する。

2 委員会の委員は、本校の教職員以外の者で高等専門学校に関し広くかつ高い識見を有する者のうちから、校長が委嘱する。

3 委員会に委員長を置き、委員の互選により定める。

4 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

ただし、欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

### (評価事項)

第3条 委員会は、次に掲げる事項を評価する。

一 本校の教育理念及び目標等に関すること。

二 カリキュラムの編成、教育指導及び教授方法のあり方、その他の教育活動に関すること。

三 学生生活及び学校行事のあり方に関すること。

四 学寮生活に関すること。

五 研究活動に関すること。

六 施設設備に関すること。

七 国際交流に関すること。

八 生涯学習及び社会連携に関すること。

九 学校運営に関すること。

十 自己点検・評価体制に関すること。

十一 その他委員会が必要と認める事項

### (評価及び報告)

第4条 委員会は、資料による調査のほか、ヒアリング、実地調査等により評価を行う。

2 委員会は、評価報告書を作成し公表する。

### (事務)

第5条 委員会に関する事務は、総務課が行う。

#### 附 則

この規程は、平成16年12月1日から施行する。

#### 附 則

この規程は、平成18年4月1日から施行する。

## 6. 平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会議事録

日 時 : 平成26年1月9日(木) 14:00~16:30

場 所 : 管理棟1階 中会議室

### 1. 開会

(本校)

それでは、本日はお忙しい中をご出席いただきまして、ありがとうございます。ただいまから、平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会を開会いたします。

私は、総務課長の櫻井と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。開会に当たりまして、本校、荻谷校長からご挨拶申し上げます。

### 2. 校長挨拶

(本校)

校長の荻谷でございます。本日はお寒い中、また本当にお忙しい中をお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。

言うまでもなく、来年、私どもの学校は50周年を迎えます。50年以上前にこの地に高専をつくろうということで、誘致期成同盟と言いますか、そういったものをつくっていただいて、知事さんがその会長だったそうですが、雑木林のところに造成して、こういう建物をつくっていただきました。ものづくりセンターの前にまだ雑木林がちょっとだけ残っているのですが、そこに100年以上前の樹木がありまして、それがこの中久喜地域の守り神、山の神だそうでございますが、それを私どもは地域の方と一緒に祭りしながら、この50年、過ごしてきたわけでございます。

この間、七千数百名の卒業生を出しておまして、それなりに存在意義はあろうかと思いますが、今回はそういうことも含めまして、大変面倒な、大変大量な評価項目について評価いただきまして本当にありがとうございます。たくさんのおアドバイス、コメントをいただきました。その中には、温かい評価もございましたし、厳しい意見もございました。それから、なるほどと私どもが改めて思いますようなご提案とかアドバイスもいただきました。今日の質疑を通じてよりよい評価をいただきたいと思っています。本日はよろしくお願ひいたします。

### 3. 外部評価委員紹介

#### 4. 本校出席者紹介

(本校)

続きまして、お手元の配付資料を確認させていただきます。4点ございます。

平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会開催要領、席次表の下にございます。2点目でございますが、外部評価委員会規程。3点目でございますが、外部評価委員会委員名簿。4点目は、外部評価委員毎の評価点一覧、これは外部評価用「評価シート(自己点検評価)」という副題でございます。配付資料は以上となります。おそろいになっておりますでしょうか。

続きまして、本日の日程についてご説明いたします。本日配付いたしております平成25年度外部評価委員会開催要領のⅢをご覧くださいと思います。

この後、外部評価委員の紹介、本校出席者の紹介の後、委員長の選出をお願いいたしまして、委員長の進行のもと、質疑応答等を行っていただきます。時間は若干前後すると思いますが、おおむね16時ごろをめぐりに質疑応答等を終了いたしまして、外部評価委員による総合評価とりまとめを、休憩を入れながら行っていただき、16時半をめぐりに講評を行っていただければと思っております。

続きまして、外部評価委員会委員の皆様並びに本校の出席者をご紹介いたします。

初めに外部評価委員会委員でございますが、本日配付いたしております、平成25年度小山工業高等専門学校外部評価委員会開催要領という資料のⅡ、構成員欄をご覧ください。資料に沿ってご紹介させていただきます。

関東職業能力開発大学校長・太田委員でございます。

小山商工会議所会頭・大森委員でございます。

小山市教育委員会教育長・酒井委員でございます。

栃木県産業技術センター所長・花田委員でございます。  
小山市副市長・宮嶋委員でございます。  
宇都宮大学工学部附属ものづくり創成工学センター長・横田委員でございます。  
小山工業高等専門学校後援会会長・吉澤委員でございます。  
続きまして、本校の出席者を紹介いたします。  
校長の荻谷でございます。  
副校長（総務主事）の糸井でございます。  
副校長（教務主事）の小堀でございます。  
副校長（学生主事）の小林でございます。  
寮務主事補の鹿野でございます。  
地域連携共同開発センター長の伊澤でございます。  
自己点検評価専門委員会委員長の南斉でございます。  
事務部長の加藤でございます。  
学生課長の須磨でございます。  
私、総務課長の櫻井でございます。よろしくお願ひいたします。

なお、本日は、副校長（寮務主事）の川上、専攻科長の亀山が公務の都合等によりまして欠席されております。

続きまして、外部評価委員会規程第4条第2項に規定される評価報告書を作成する関係上、レコーダーによる録音及び記録写真、速記等をとらせていただきたいと思いますのですが、ご了解いただけますでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

ありがとうございます。それでは、進めさせていただきます。ご了解が得られましたので、録音及び写真等をとらせていただきます。

また、本日は、評価報告書を作成する関係で速記の方にも出席願っております。

本日のご発言内容については、外部評価委員会要旨として平成25年度外部評価報告書に掲載させていただき、それ以外の用途には使用いたしません。その旨ご報告させていただきます。

## 5. 委員長選出

（本校）

続きまして、委員長の選出をお願いしたいと存じます。

委員長の選出方法につきましては、本校の外部評価委員会規程第2条第3項でございますが、「委員会に委員長を置き、委員の互選により定める」と規定されております。委員長の選出について、委員の皆様方からご意見等ございますでしょうか。

（委員）

関東能開大の太田先生が適任かと思っておりますので、よろしくお諮りください。

（本校）

ただいま、太田委員が委員長として適任であるというご発言がございました。ご異議等がなければ、太田委員に委員長をお願いしたいと思っておりますが、よろしゅうございますでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

それでは、太田委員が委員長ということでご選出されました。委員長のご選出ありがとうございました。

それでは、これ以降、議事の進行を太田委員長にお願いいたしまして、Ⅲの次第の6. 質疑応答から8. 講評まで、順次進めていただきたいと思います。と存じます。

太田先生よろしくお願ひいたします。

## 6. 質疑応答

〔全般的な意見〕

（委員）

まず最初に、この時間は、既に報告書等によってご評価いただいた過程で生じたいろいろな疑問点、質問点、またご指摘等があるかと思しますので、直接、高専の担当の先生方にご回答いただくことによりまして、委員会として適切な、また的確な評価をしたいと思っております。よろしくご協力ください。

それでは、お手元にお配りした、膨大になっているのでちょっとびっくりしているのですが、この評価に当たりましての疑問点、あるいは他の委員の評価点をご覧いただきましてお気づきの点がありましたら、各委員からご発言いただきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

(委員)

今お話しありましたように、膨大な内部評価資料がございまして、内部資料に基づくと全てこうかなというところなので、実態的なものがなかなか掌握し切れないということで、皆さん苦労されたのではないかなと思います。その中で、本校から一步離れた立場で評価させていただきました。こんなところがちょっと感ずるところ足りないかなということで点数はつけさせていただいたのですが、これだけ膨大になりますと一つ一つの項目で話をすると長くなりますので総体的に、ただいまのご挨拶にありましたように、50年という長きにわたって運営されていますので、その長い間、いろいろ是正されてきているなど考えております。

あとは、私、学校の中をずっと見てきて、方針と各教科の先生方の意思の疎通が十分になされているのかどうかというところが、ただ一点、冒頭にありまして、その辺を常に各項目で振って評価しましたので、ちょっと辛口の点数になったところもございまして、そんなことで評価させていただきました。おおむね内部評価どおりの運営がされていると感じたところであります。そんなところでよろしいですか。

(委員)

ありがとうございます。それでは、まず順番に各委員の方からご意見いただければと思います。

(委員)

大変申しわけないのですが、本日、ちょっと声を痛めておりまして、長くお話しできないので、お許しいただければと思っております。

日ごろから私ども、中学校長という立場で本校を見させていただいたり、しかも小山第三中学校に在籍しておりましたので身近に生徒さんの様子であるとか、教育委員会の職員として外に出ていただいて授業の支援、あるいはいろいろなボランティア活動であるとか部活動であるとか、市民の皆様に対して高専の存在を十分にアピールしていただいていると。やはりうれしいのは、地元が高専があって、そこの高専に入ることを目標に中学校生活を送っている子たちがいる。また、本校卒業生のみならず、本校のいろいろな生徒さん、学生さんにお会いするわけでありまして、本校に学ぶことを誇りに感じて日々生活しているという実態がございまして、日ごろから本学の教育方針、あるいは実践に対しまして非常に感謝しているところであります。

本当に膨大な資料だったものですから、内部評価委員の皆様のご意見を検証するとか、どこをもってどのように判断したのか、あるいは場合によっては追認するという形で評価させていただいたわけがございまして、やはり一番ネックになりましたのが、評価基準ということについて非常に悩んだわけがございまして。到達度評価であるのか、あるいは他と比べて相対評価であるのか、本校なりのスタンダードを持っていて、ここまで達成したら、先ほどの到達評価と絡むわけがございまして、おおむね達成していると言えるとか、そういう客観的な尺度が私自身にもございませぬでしたし、また本校のそれぞれ各部で14章入っているわけがございまして、その辺につきまして若干迷いがございまして。できればそのような形で私たちに対して、もうちょっとこのような視点でこのようなスタンダードで評価してほしいのだというようなことがあればよかったなと思っております。今後の方針等につきまして後ほど、今日お答えは要りませんけれども、一緒にお話ができるとありがたいと思っております。

本当にいろいろとお世話になりまして、ありがとうございます。

(委員)

やはり採点するのは非常に大変難しかったかなという思いが1点だけございます。というのは、私自身も実は、八戸ではありますが、高専卒業生で、先生方のいろいろな意味でここにあらわれない難しさも存じ上げているつもりでございまして、表現にないところもつつい頭をよぎるものですから、点数をつけるのが非常に困ったというのが本音でございます。

一方、中にも書いていただいているところもあるのですが、さっき校長先生からあった50年たつと。本当に今、高専はどういう人が望まれているのか、あるいは高専はどんなところであるべきなのかということを時々思いながら点数をつけて、ちょっと的外れの回答、あるいはコメントになっているところもあるかなと思いつつながら、でも私の思いということで書かせていただきました。ただ、いずれにしても、高専というのは現場から見ればありがたい人材を輩出してくれている。これは多分、これまではもちろんですが、これからも変わらないところなのだろうなと思ひ、先輩としてももう少しこうあってほしいなということも含めて点数をつけさせていただいたつもりです。そういう思いもあったので、点数はあえて若干低目にしたような気がいたします。

(委員)

高専には市の施策等についても多々ご協力いただいておりますので、この評価に当たりましてもどうしてもそういう意識が働いた中で、優位に評価させていただこうかなと思つてはおりましたが、私もこういった学務的な部分についての専門外でございまして、内部事情についても十分把握していない中で、そういう意識は持ちながらも、やはりせつかく評価という機会をいただきましたので、もちろん50年という長きにわたっての学校運営がなされているわけでありまして、特に大きな問題はないだろうという意識は十分持つてはございますが、せつかくの評価という意識の中で、ちょっと的外れもあるかもしれませんけれども、理解しがたい部分のことも含めながら、ちょっと厳しい目線で見させていただく中で、よりこの学校がさらなる向上につながればという思いの中で、あえて意識して評価を下げさせていただいたというか、そういう目線で見たとところについては意見を述べさせていただく中で、極力それに対する考え方を入れさせていただきました。この後の議論の中でお伺いできればありがたいなと思つてございます。

以上でございます。

(委員)

私は宇都宮大学ということで、こちらの高専の卒業生を3年時編入で受け入れたり、専攻科の修了生を大学院で受け入れたりということで、非常にかかわり合いもありながら、私どものほうで見た小山高専の卒業生、修了生のことを思い浮かべながら、それからそのほか全国からの高専生のことを思い浮かべながら拝見いたしました。

最後の総評のところでも私はちょっと書かせていただきましたが、全般的に見て高専を取り巻く状況はいろいろあるとは思つのですけれども、小山高専の先生方、学校を挙げて非常にいろいろな多様な取り組みをおやりになられていて、しかもこれだけの膨大な資料の中に充実した内容が入っていて、本当によく努力なされていて、頭の下がる思いでございます。

私ども、高専の卒業生の方を見ていますと、普通高校の学生とは全く違う形の人材が育てられていて、工学部という立場でみますと、好奇心とか、探究心であるとか、積極性という面では、普通高校の学生にはない資質を持った学生をきちんと輩出なさっているというのが全般的な印象でございまして、小山高専の生徒さんもその例外ではございません。小山高専の生徒さんを直接指導させていただいたこともありますけれども、非常にいい印象をもつております。したがって、全体に、小山高専で教育運営活動が順調に進んでいるのだろうなと思いつつながら評価させていただきました。

一部、若干低い点数をつけた項目もございまして、それは一部には私が多分資料を読み込めていないせいもあるかもしれませんし、この後のいろいろなやりとりの中でまた考えていきたいと思つております。全体的に私としては非常によくなさつていらつしやるなと思ひます。

以上でございます。

(委員)

私、前回の会議のときに、一番内通している者として厳しい評価をつけるであろうということにくぎを打ったわけなのですが、これを見ましたら、私が一番いい点数をつけているのではないかとというのが幾つもありまして、これはちょっと反則行為だったかな、もうちょっとびしっとやればよかったのかなというような感じはいたしております。

評価委員の先輩方に全て言われてしまいましたので、私が出る幕はないのですけれども、あえて大きく差があるとすれば、本校の学生は部活をしない、部活をやる生徒が非常に少ない。それと、15歳から22歳までの、青嵐寮というのがあります、一部の学生は通学するのが難しいということであえて設けてあるわけなのです。長岡とか長野というのは雪が深くて、冬場になりますと3割から35%ぐらい寮生が増えるのだそうです。ですから、その学生さんたちは絶対悪いことをしない。悪いことをしたら家から通えないからなのです。そのような実態もあるようでございます。

加えまして、長岡高専などですと7割が進学、群馬高専は8割が進学、長野に関しては進学率が非常に低くて、地元の企業にさらわれることが多いというような実態を耳にいたしております。

私は後援会会長という立場からしますと、高専独自、小山高専だけではなくて、高専のあり方自体をもうちょっと横のつながりをつくって連携していくのも1つの策なのではないかと思っております。

以上です。

(委員)

ただいま、私を除いて6人の方のご意見をいろいろいただきまして、ありがとうございます。最後になりましたけれども、私、この評価委員に加えていただいて非常に感謝しているのですが、他の学校を全体に見るチャンスはなかなかなかったもので、ちょっとだけ個人的な感想を述べさせてもらって、あと時間が少しありますので個別の項目で特に幾つかピックアップして意見交換させていただければありがたいと思っております。

高専を取り巻く環境が、特に新しく全国の高専が統一されて、高専の独立法人の機構になったのですかね。そういう機構になったので、下手すると個別の高専の特色がなくなってしまうのではなかろうかというのをちょっと危惧した時代もあったのですけれども、というのは、私の世代からちょうど——ちょっと話が長くなってごめんなさい。私が中学校を卒業するぐらいに多分最初できたのです。だから、世代的にはちょうど高専世代と言ったら大変僭越ですが、そのような時代というか年齢の役回り、私が出たのは東京の下町の中学校ですけども、そのときでもやはりトップ10の人たちが何人か行った。その後も社会に出て活躍しているというようなことを耳に挟んでいるし、地元に戻ると彼らと話すのが非常におもしろい。生き生きとしていた時代を過ごしたように思っております。

とは言うものの、やはり50年近くなってくると、時代背景が変わってきた。その時代背景にどうやって対応してきたかということが一番気になって、先ほどの校長先生からのお話の中にも、50年間の長いようでありながら、結構短くて、それで何とか時代に合わせないといけない。そこが本来のものと高専に望まれたところと、時代に合わせてどこが変わってきたのかということをやちょっと見させていただけたらと思って、正直言って、かなり根性込めないと自己点検書を読みこなせない。私が書いた文章を今みるとちょっとおかしいと。さっきここに来てばらばらと見ると、まだ読み込んでいないなというのは自分で自己批判しているのですけれども、個別の問題で幾つか指摘したいなということもあったので、それは多分細かい問題ですので、後のところで置きかえたいと思っております。

私の意見としては、まずは総論としてはそんなところでございます。

ほかの委員の方、さらに何かつけ加えたいところはありますか。あとは個別の問題で少しやらせていただけていいですか。ありがとうございます。

[1章]

(委員)

それでは、個別の問題のことにしましては、お手元の長いA3のところを見てみますと、右のほうに各委員の方のコメントが書かれておりますし、これと同じような内容でも結構です。あるいは

は、これに追加してご意見がおありになりましたら、ぜひお願いしたいと思っております。

まず最初に、時間がありますので、個別の章別にやってよろしいですかね。それでは、まず第1章で、小山高専の教育理念及び目的に対して何か皆さんからご意見ございますでしょうか。特に私みたいな年齢になってしまおうとどうしても、過去に何て書いたのか、どういう意見を持ったのかちょっと忘れてしまうときもありますので、お手元のA3の資料を見ながらでも結構ですし、分厚い自己点検書を見ながらでも結構です。ご意見がありましたらご発言をお願いしたいのですが、いかがでしょうか。第1章の教育理念と目的です。

もしあれだったら、お一方かお二方、名指しで申しわけありませんけれども、ご意見いただくようなことになって構いませんか。第1章のところでは、文章をみる限りはかなり点数が高いところが与えられていると。

先ほどもあったのですけれども、評価点をどこに、相対評価、絶対評価のこともちょっと気になったことは気になったのです。私は、結果的なのですけれども、どこを基準にするかによって、多分、個人個人の意見が違ってきってしまうので、私も最初、これを読んだときに、そのことについて委員同士で懇談したほうがいいのかなどと思ったときもあったのですけれども、多分それは違ってもしよりののではないかと思いましたが、意見交換は全くしていません。今ここで各委員の方のご意見が記載されております。いかがでしょうか。何か特にございますか。

(委員)

教育理念とか目標とかをいろいろな配付物、あるいは掲示によって学生さんたちに周知しているということは非常によく理解できるわけなのですけれども、学生たちが目にする機会があるということと、あと学生たちがそれをどう理解しているか、またどういう状況にあるのか。また、中学を卒業して高専に入ったばかりの生徒さんたちがどのように感じているのか、我々教育する側が思っている思いと、生徒さんたちがそれをどう感じ取っているのかというのは非常に興味深いというか、難しい面もあるかとは思いますが、その辺に関して、特にしているという以上、何か学生と教員との意見交換とか、そのようなことがもしあったり、あるいはそのときの生徒さんの反応とかということで何かあれば、ちょっと補足いただけるとありがたいです。

(本校)

軽いところで、先生方から今、周知という言葉が出てきたと思うのです。私どもは何年か前から、高専機構による機関別認証評価ですとか、JABEEの評価ですとか、こういった自己点検評価も含めて、そういった外部評価を受けることになってから、周知という点に関しては、例えば学生に対して、名刺サイズのような基本的な部分とやや詳しい部分とを分けて、ポケットサイズでいつでも見られるというような状態の、そういうカードを用意いたしました。それが1つです。

もう1つは、教育目標に従ってそれぞれの専門分野の教育を行うに当たり、ご存じのようにシラバスというのがあります。シラバスに関しては、例えば変更がある場合も含めて授業の前に、前にとというのは4月ですとか9月ですとか最初の時間に、この科目はこういう目標でここまで到達することを目的として授業をやりますよというインフォメーション、メッセージを学生に伝えるような習慣にはしてきております。

それが、もうちょっと言いますと、シラバスがあって、シラバスに基づいて授業を行って、授業を記録に残して、試験により評価して、その評価のプロセスがあってというその辺までを、いわゆるエビデンスとして意識して残すようになってきたというところなんです。

(本校)

教育理念とかそのものの結果、どのぐらい周知されているかについては、本編のほうの13ページにアンケート結果が載ってまして、その中では、学生にとっては「技術者である前に人間であれ」という言葉はかなり浸透しているということは事実だと思います。それについては、技術者倫理に直結するところでもありますので、我々からも折に触れそういったことを話したりということをしております。

さらに、専攻科の入試のときにアドミッションポリシーの確認であるとかそういったこともさせ

ていただいていますので、そのところでも一応確認ということではあるかなと思います。

(委員)

第1章につきましては、それぞれの設問につきまして、学校とか教職員の周知については十分にされていると私のほうはとっておりますが、3番目の社会に広く公表されているかということについての問題がちょっとあるのではないのかなという意見を私は持ちました。それぞれ教育上の見方で高専のすばらしさというのは皆さん承知しておりますけれども、例えば栃木県の南部に位置している小山高専が地域にどのように根づいているとか、地域社会の中でどのように評価されているかということについては、私自身も縁がありまして高専さんのお手伝いをさせていただくまではしっかりと認識していなかったのが実情なものですから、その辺について若干厳しい意見を持ったのですが、皆さんご存じのように、昨年度、地域連携協力会を立ち上げさせていただきました。現在のところ100社程度協力していただいていますので、地元の企業であるとか近隣の市町村、県の大きい企業、中小企業も含めまして協力して小山高専との連携を進めていくという会ができましたので、今後、地域社会に広く公表された小山高専というのが生まれてくるのかなと思って、その点では期待はしております。点数はフルマークではなかったですが、非常に期待しているところであります。

(本校)

では、私からもちょっと追加で。先ほどの目的とかも、いろいろ小さいのでやっているけれども、正直言って、大きな、「技術者である前に人間であれ」というのはよく伝わるのですが、その下にある幾つかの項目は、ある程度は伝わっていると思うのですが、私どもはそのほかに、グローバル化といわれる国際性というのが実は最後に書いてあるのです。あれが最近は本当に重要視されているのですけれども、そちらのほうを今、学生に強く言って、企業に行ったらどうしてもグローバル化で世界へ出なければいけないということをかなり強目に言っております。

それとシラバス。先ほど4月と9月と言いましたけれども、シラバスも後ろのほうに出てきますが、ただ、それだけではなくて、やはり授業を2、3回やったら、次はこのところでこういう目的でこういうのをやるのだよというのを、2、3回の授業で一度はみんなにアナウンスしながら、進行度とかも含めてやっているのですけれども、それでもまだトータル、実際にアンケートをとってみますと、後ほど出てまいりますけれども、シラバスの利用度が低いのも実情で、その辺もまだ教務としても努力の必要性があるのかなとは感じております。

(委員)

ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

では、私からちょっと1点。これには書いていないですね。1つだけ気になるのは、こういう「技術者である前に人間であれ」という言葉自体は、言葉としてはわかるのですけれども、その中身になってくると、正直言って、中学校を卒業して入ってきた学生さんがどの程度理解できるかという、もちろん上に行けば最低限、5年間いけば少しわかってくるかと思うのですが、そういう自分たちの一番大事なキーポイントのところを高専側としてはどの程度理解するように努めていращるのか。言葉はわかるのだけれども、相手側の学生さんのほうがどれほど頭の中に残って、その意味を理解して、自分もそれに邁進しよう、あるいは努力しようというようなことをわからせる努力はどうなさっているかなというのをちょっと聞きたいなど。それは自分自身に返ってくる言葉なのですけれども、いかがですかね。言葉の中身をどのようにして学生さんに理解してもらうように努力なさっているかということもしありましたら、お話しいただければありがたいと思うのですが、いかがでしょうか。

(本校)

私がよく言っていますのは、昔言われたのが、オウム真理教の話などを時々出すのですが、やはり技術というのは正しく使えばすばらしいものであると。特に医療機器とか、これは学生もよくわかると思うのですが、やはり使い方をひとつ間違えるとあのように殺人的なもの、あるいは非常に社会を騒がすものになるよという例を時々したり、今言われているいろいろなウェブとかへの投稿、

ああいうものも、情報を正しく共有することはいいことなのだけれども、逆にとれるようなことをやると、それは人間というよりもむしろ悪の声をばらまいているのだよということは時々言うようにして理解させようと。なるべく幼稚なといいますか、わかりやすい社会的な言葉で言おうとはしているのですが、それが本当に伝わっているかと言われたら、ちょっと私も自信はないですけども、そういう話で説得はしていると思っています。

(委員)

ありがとうございます。わかりやすい言葉で学生さんたちにお話しなさっているということが理解できました。ありがとうございます。

では、その次に移ってよろしいですか。

[2章]

(委員)

ありがとうございます。それでは、第2章のほうなのですが、教育組織について。例えば組織が適切なものになっているとか、全学的なセンターを設置している場合には、それらが目的とどの程度合致しているかというようなことが多分論点ではないかと思うのですが、委員からいかがでしょうか。

もしよろしければ、自己点検書に書いてある、読めばそれはわかるというお話かとは思いますが、1専攻5コースに対応した適切なカリキュラムにしましたという背景をちょっとだけ説明してもらえればありがたいと思うのですが、いかがですか。

(本校)

本来、亀山がそれに対してコメントがあるのですが、私のほうが受けておりますので。2年前、私も専攻科長をやっていたのですが、やはり専攻科と言うとスペシャリストを育てるのですが、実はほとんど縦割りだったのです。横のつながりが無い。極端に言いますと、今の電気自動車をつくる場合に、電気、機械だけではなくて、環境、湿度、乗り心地とかという横のつながりが非常に重要であると言われ始めておりました。そのときに、自分の専門だけわかっているのかという話がございます、それではだめなのだろう、やはり横に広げなければいけないということで1専攻にして、それをつなぐようなプロジェクトデザインというような授業も入れ、実験を含めたものも入れて、横のつながりを重視しよう。プロジェクトデザインも実は全コースの専攻科生と一緒にグループになって物を考え、つくり、検討していくというシステムです。そういうのがどうしても必要だろうということで、現在、コース制にしたということは非常に有意義であると私も思っておりますし、今の亀山専攻科長もそれは非常にいい効果を出していると感じております。

(委員)

縦割りのカリキュラムだったものを、自分の専門外も理解できるような形の仕組みをつくったということだと理解しました。ありがとうございます。ほかにいかがですか。

(委員)

一般科目と専攻科の先生が多分ダブって、単独でそっちだけという方はそんなに多くないのだろうと思うのですが、物流量としてうまくバランスがとれているのでしょうか。

(本校)

物流量……

(委員)

忙し過ぎるとか、そういう意味で、先生方がすごく大変なのではないかなという思いがしているのです。例えば大学だったら専属で先生が結構おられますけれども、高専の場合、人間的な配置が簡単にできないですね。ですから、そこで専攻科を充実させることもすごく大事なのですが、一般教科は確実にやらなくてはいけないし、そういう意味で大変なのではないかなという。

(本校)

今、うちのほうは、専攻科というのは特別の先生がいるわけではなくて、専門学科の我々も教えているわけなので、その専門学科の先生の教育のコマ数と一般科の教員のコマ数とかは時々チェックしながら、なかなか難しいのは、我々専門学科のほうは卒業研究というのがございまして、確かに前期は少し軽いというように見られがちなのですが、後期は逆に夜の9時、10時何のそのと。そういうところはカウントされないわけなのです。そういう目で見ても、やはりある程度バランスはとれていると私は思っておりますけれども、ただ、部活とか出前授業とかもいろいろありますので、やはり教員というのはなかなか忙しい。

(委員)

まして、高専の場合、その他でひっくるんで言ってしまっていますけれども、さっき言った15からマックス22までの、こっちのほうはいいのですが、この辺のこともしなくてはいけないので、そういうことも含めてすごく大変な状況というのは知っているものですから、済みません、ちょっと変な質問をさせてもらいました。

(本校)

状況もみながら、やはりコマ数もちゃんと計算しながら、バランスをとるように、それぞれ個別の仕事量を考えているのですが、どうしても専門ですから、専門間では少しばらつきが出るかもしれませんが、全体的にはみんな一生懸命やっただけという事です。

(委員)

科長さんを中心に調整をとられているということになるのですか。

(本校)

一応学科内で調整するようにしていただいております。

(本校)

今お話しのように、本当に高専の先生というのは忙しいのです。大学と比べると大分忙しいのではないかと思います。授業も多いし、今おっしゃいましたように、高校1年生からの学生を相手にしていますから、いわゆる学生指導というのが物すごくあるのです。さらに地域貢献で出前授業とかいろいろやりますので、みんなそれぞれ重要なのですが、忙しくて大変だなという思いです。一方では、科研費をとってこいとか、外部資金が大事だとかいうことになるので、みんな大事なのです。なかなか下手なことをゆっくり考えている暇がなくて、まず動けたいところがあるのではないかなと思います。

(本校)

私からもつけ加えさせていただきますけれども、先ほどから第2項目に入りまして、一般科とのバランスですとか個々の先生方の負担という言葉が出てきていると思うのです。そういう中で何とか切り盛りしてやっているということ。ただ、そういう切り盛りしながら専門教育を可能な限りきちっとやっているのだと思うのですが、あえて私から傷口をと言いましょか、身内が傷口を広げてどうするのだと言われそうなのですけれども、その1つ前のご指摘の、人間らしさの教育はどうなっているのかという話の中で、例えばという話で犯罪との絡みをもたせて、そういうこととの技術教育と倫理教育的な話をお話いただきましたけれども、私からは、ちょうど後援会長もおられまして、それから寮務主事は欠席ですけれども、主事補の鹿野がおりますので、いる時間帯にと思ひまして、例えば時間が足りないという中には、専門教育に対する時間も足りない部分はあるけれども、人間らしさの教育に対する時間も足りない部分が自然と出てきてしまう部分があるのです。

どの委員の方たちも話題にしていらっしゃる、人間らしさというのはどこでチェックしているのかという話題になってしまって、みずから傷口を広げようとしているのですけれども、ですから、そのときに、私は、さっき言った犯罪との絡みで技術教育の倫理観を教育しているというときに、も

う1つの話題として寮があります。寮があって、寮こそが教室でマスで1対40で教育しているのとは別に、私生活の部分もかかわってくるわけで、人間らしさということになりますと、寮におけるかかわりというのが言ってみれば個々の家庭での親子の教育にさわる部分もあると思うのです。その部分も含めまして、繰り返しになりますが、これで終わりにしますけれども、技術的な部分に触れる人間らしさと私生活といえましょうか本当の人間性、道德教育みたいなものにも触れる部分と2つあると思うのですが、どちらも忙しい中で欠乏している現実の中でも、ややバランス的には、繰り返しますけれども、人間らしさという点では道德面での教育がやや多目に欠如している部分があるかなと。あえて身内の傷口を広げるような提案をさせていただきますけれども、その辺は委員の先生方、どのようにお感じになっているか。

(委員)

多分、第2章のところで幾つか出てきた中にもあると思うのですけれども、先ほどのお話とつながりますが、専門教育と一般教育をどうやってリンクさせるかということは学校教育の中で、特に工学系の場合、一番難しいところだと。片方に重きを置き過ぎてしまうと、片方がまただめになってということで、ある有限の人的な資源と有限の時間の中から答えを見出していかなければいけない。

ちょっと自分のことになってしまうのですが、私の前の学校でも大きな問題になりまして、学校の大きな改革のときに設置者が全寮制にしるということを発言したのです。誰か多分わかるかと思うのですけれども、結論から言うと、できなかったのです。要するに、学校が、あるいは設置者が持っている経済的な基盤からしてもとても無理だった。結局、それまでにあった寮を一部改善しただけでおさまってしまったのです。スケールとしては10分の1。かつての、私たちにとっての旧制の高校、戦前の教育の根幹をなした、そういう私的な生活を通しての教育ということが、ある人にいわせれば魂の触れ合いだと言ったのですけれども、今になると非常に難しい。まして地方から来る人たちにそれをどうやって担保するのだと言われて、答えがなかなかなかったのをちょっと思い出しました。

ただ、いずれにしる、大事なものは、そういうメンタルも含めて、別なところでも多分出てきてしまうかと思うのですけれども、寮生活が非常に重要だと思って、私よりも年齢が上の方から聞いても、やはり寮生活は非常に大事だと。そこでの人とのつながりというのは一生切れないよと言われたので、いい場合もあるし悪い場合もあるのですが、確かにその教育というのは大事だなと、今のお話を聞いて改めて感じました。

余り長くなってもあれですから、先に行ってよろしいですか。

(委員)

センターの件で1つよろしいですか。

(委員)

どうぞ。

(委員)

4つのセンターが設置されているということで、適切に運用されていると思うのですが、これも指摘したのですが、それぞれのセンター間の連携が密にいつているのかどうか、それがちょっと疑問な点もありましたので、そんなことを書いておいたのです。例えば同じ日に高専の生徒さんも含めて関係する行事が2つ重なってしまうとか、年当初に出てきているのです。そうすると、これは産学官連携で先生は行っておられますから、そちらのほうの行事とこっちのセンターの行事が同じ日の1時間ぐらいしかずれていないのです。場所が市内の端と端ですから、そんなのは今後ちょっと調整が必要かなと。せっかくいいものを開催するに当たっても、2つ参加したいという人もいるでしょうし、動員力も考えますと、やはりちょっと大きい時間のタイムラグをとったほうがいいし、日にちをずらしたほうがいいということもありますので、そんなことが感じるところであります。

(委員)

実際、センターを設置しても、その間の連携がうまくいくかということですね。調整が必要であるというご指摘だと思うのですが。よろしいですか。

[3章]

(委員)

それでは、第3章のほうに移らせてください。第3章は項目名としては教員及び教育支援者についてです。A3で言うとかかなり長いのですけれども、2ページ目から3ページ目にかけてです。特にご指摘する点がございましたら。少しペースをゆっくりしますけれども。どうぞ。

(委員)

私、ちょっとわからないものですから、一般科目の非常勤講師の配置ということで、この資料ですと65ページにありますけれども、この辺の非常勤講師に頼らざるを得ない環境というのは、どの辺にそのようになるのかわかりませんが、64ページの常勤の講師の方との比較からすると、割合的に多いのかなと思うのです。他校との関係もよくわからないものですから、やや多いのかなという印象をもった次第なのですけれども、その辺はどのように捉えたらよろしいのかなというのをちょっとお伺いできればと思います。

(本校)

数から言うと、確かに少し多いようなのですけれども、ただ、1、2、3年生から一般科の先生は応用数学とかも全てお願いしておりまして、そちらのほうにもやはり注力していただきたいということになると、どうしても低学年のほうで足りないなど。先ほど言いました専門学科のほうと一般科のコマ数も大体合わせておりますので、それを合わせようとする、どうしても一般科のほうに負担が多くなるので、今はまだ非常勤が少し多目になっているのが現状です。

(委員)

その辺の配置と言うのは、予算的な部分というか、そういうものもあって、なかなか常勤の配属が期待できない中で、頼らざるを得ないという捉え方をすればよろしいのでしょうか。

(本校)

そうですね。もう少し教員がふえればもちろんあれなのですが、例えば理科系でも3人までとか、国語は3人までとかという数の制限があって、その中で1、2、3年全部、15クラスをやっていかなければいけない。プラス応用物理とかもありますので、そちらのほうにシフトしている学科もあって、一般科のほうはちょっと大変かなという。

(委員)

それはわかりませんが、やはり非常勤よりも常勤としての先生が配置されることが、より生徒に対しての熱心な指導につながるのかなと私は思ったものですから、なるだけそういう配置が望める……それは高専だけではなかなか難しい部分もあるのだらうと思うのですけれども。

(本校)

結局、人数に起因する部分があるのですけれども、やる科目がその先生の専門と違う科目があるわけです。例えば社会というのではなくて、地理であったり、あるいは倫理社会であったり、それ以外の科目だとやはり専門的には教えるのから、非常勤の方にとということもあります。そのあたりがちょっとどうしても無理な部分があるのです。コマ数はそれぞれ目いっぱい持っていたているのですけれども、やはりそういう部分が起こってしまう。

(本校)

どこの高専も大体同じでございます。一般教育に充てられる数は限られておりまして、人文系が特にその部分は少なくなっています。これは我々のときからずっとそうだったのですけれども、先ほどありました、一般教養をどうするのだ、人間であれということの部分はどうするのだとい

うことで、本当に私も未熟だなと感じているところもあります。そこに起因するのですけれども、設置基準の中でそういう形になっているものですから、なるべくその辺を応えられるような人をお願いしてやっていたらというのが実情です。

(委員)

教員の平均年齢のことがちょっと気になって、48.3歳というのはほかの高専と比べてどうなのでしょう。他の高専ではその実態がちょっとわからないので。

(本校)

大きく変わっているわけではないと思うのです。

(委員)

技術士とか博士号とかそれだけの特殊なものをお持ちになっている先生方というのは、どうしても高くなりますよね。

(本校)

ええ、それと、企業出身者を結構、中途採用みたいな形で、ですから、初めから40、あるいは50、場合によっては50代後半、60近い人も教授として採用するということがありますので、みんな30ぐらいから上がっていくわけではないのです。だから、その時々で、いきなり教授、いきなり准教授で入りますから、そういう意味では、結果的にはそうなるのですけれども。

(委員)

その方たちが退職されたら、がくんと落ちるといふ……

(本校)

必ずしもそうならないのです。

(委員)

ならないように補充していかないといけないなという気はしました。

(本校)

そうですね。

(本校)

なるべく若返る方向で検討はするのですけれども、専門学科の場合は特に学位を要求するとなると、新卒でも28歳ですので、企業での平均年齢とはちょっと偏ってくると思います。若手と我々が言っているのは30代ぐらいでして、中堅どころで40、50ぐらい。50は中堅……失礼しました。私は中堅と思っているのですけれども、そんな感じです。

(本校)

あえて言いますと、全体に年齢が今申し上げたような理由で高くなっているのです、例えば教授の昇進が50ぐらいなのです。大学だったら40ぐらいからあるのです。そのあたりがちょっとモチベーションの問題がやはりあるかなと思うのです。そんなところがあります。

(委員)

わかりました。それと、この3章については、各委員の先生が非常に配慮すべきだという答えを出していたところがありましたね。——結構です。第2章のほうで言うのをちょっとうっかりしました。

(委員)

それでは、もしなければ、私のほうでちょっと1つだけ。今、高専さんも含めて大学の教員を採用するときに幾つか問題があると思うのですけれども、そのうちの1つは、いわゆる研究能力と教育能力をどうやって判定して、どのような割合で採用するかということが1つと、外部ばかり採っていて、内部のせつかく若い、例えばそれこそ大学で言うと修士だとか博士を出たばかりの人たちを採用して、ここでは助教と言っているのか、等から昇格していくような、どのような仕組みをとっておられるかというのは外ではなかなか見えない。

これも自分の自画自賛になってしまっていて申しわけないのですけれども、難しかったのは、どの土俵で評価するか。何を言っているかということ、例えばある人事の採用が出てきたときに、それこそ研究を重視するのか教育を重視するのか、そのバランスだよとやるのか、意外と内部から昇格するのは非常に難しい。なぜかと言うと、学校教育のほうに主眼でやっていたら、外へ出て行ったときになかなか評価されない。ですから、そうすると、若いときに所属していた学校運営や学校教育に一生懸命努力してきた人がなかなか上がれないような仕組みに今、日本はなり過ぎているのではないかという、これは私の個人的な危惧なのですけれども、そうすると、その意欲をそいでしまう。それをこちらでは少し検討なされているのかなと、もしあったらお願いしたいなと思っているのですけれども、いかがですか。逆に言うと、これは教えていただきたいというのが正直なところです。

(本校)

特にというあれではないのですけれども、大学ほど研究を厳しく見ているということはありません。やはり教育が主体であるということがあります。教育、研究、地域貢献という3つの大きな柱がありますので、それプラス学校運営に対する貢献度、全体を通してですけれども、そこを総合的に評価して昇格については考えております。先ほど校長もおっしゃいましたけれども、年齢的に50歳ぐらいをめどに教授と。それがいいかどうかはちょっとあれですが、もう少し若くしたいというところもありますけれども、そういった形でやっているというのが実情です。

(委員)

逆に言うと、内部昇格者と外部から採用した人の割合というのはどこかに出ていましたかね。ちょっと見えなかったのですが。公表しなさいと言っている意味ではないのですけれども。

(本校)

それは特にはないと思います。

(委員)

前のところでやはりこういう外部評価で指摘されまして、やったらそこそこだった。そこそこだったという意味は、内部が60%ぐらい、外部が40%ぐらいで1つの学科を構成していた。結局、結果的にはそうなったのですけれども、それでちょっと今気になってそういう発言をしたのです。

(本校)

教員が退職なされると、内部からの昇格も含めて、とにかく絶対数が足りませんので、誰かを採用するわけです。そのときには、今話がありましたように、教育、研究、地域貢献、みんなバランスがあるかということについてかなり審査項目をつくってございまして、それから科目によってですが実際に模擬授業をしてもらうのです。そこで判定するとかとやりますので、そこそこちゃんとしたふうになっていると思います。

それで、内部からの昇格も、どうでしょう、半々ぐらいですかね。

(本校)

ええ、内部もそれなりにちゃんと評価していますので、年齢と成果と貢献度と見合わせてやっておりますし、毎年そういう報告書を校長にみんな全員出していますので、自分なりに大きく書いても、全体的に見たら、いやそんなに貢献していないとか、小さく書いても、彼はちゃんと頑張っているよという、みんなで評価しながら見ていっていますので、大体バランスはとれていると思います。

(本校)

あと、全教員に対して校長はヒアリングをしまして、おっしゃる教育、研究、その他の成果について確認し、意欲を聞くということをやっております。

(委員)

ありがとうございます。それが自己点検書に出ているといいですね。これは揚げ足をとっているわけではなくて。

(本校)

確かにそのとおりです。

(委員)

この3章のところで、今の教員の評価にかかわることではありますけれども、教員の自己評価書の提出ということが述べられているわけですが、ちょっと気になりましたのは、提出率がこれでもいいのだろうかということでございまして、やはりこれは100%を目指すのが本来であろうということでございます。

あともう1つ、今のお話で教員の評価ということに関して、教育、研究、地域貢献、学校運営という4つの目でみるという立場からしますと、例えばこの資料にあります自己評価の項目がそれを反映した項目に全部なっているだろうか。この資料で、例えば92ページとか93ページを拝見いたしますと、これは主に授業等教育に関することの抜粋なのかなという気もするわけですが、地域貢献とか運営とかその点についての自己評価は項目にちゃんと含まれているのか、その辺が余り明確ではなかったかなという気がいたします。

(本校)

まず、提出の実績が低いということは、我々も頭を悩めているところではあります。全員必ず提出のことと言っておきながらこの状況ですので、これについては今後も継続して、何か有効な施策を考えながら対処していきたいと思えます。

もう1つの、自己評価の中の、これに載っているのは一部だけですので、他のところも当然入っておりますので、一応満遍なく出しているつもりです。ただ、ここでみるのは授業等教育面についての評価項目なのですが、研究面については研究業績を毎年出していますので、それである程度把握ができるということになっております。

(本校)

今、ご覧いただいているのは自己評価の一部です。これはあくまでも自己評価なのです。そうは言っても、機構から出ている項目は、例えば校務にしても、担任を何回やっていると、何を何回やっているとという項目がありますので、かなり正確ではあります。ただ、いつも私どもが壁にぶち当たるのは、例えば研究業績ですと単純に論文何報とか発表件数何報という数字が出てきてしまうのですけれども、残念ながら、先ほどどなたかの委員の方がおっしゃったように、クラブ活動に対してどういう取り組みをしているとか、研究、地域連携、管理、教育という教育の部分のポイントの出し方がわからない、いつもその壁にぶち当たっているところではあります。

(委員)

大学でもその辺はいつも頭を非常に悩ませているところのございますので、これといった解はなかなかないかとは思いますが、努力なさっているということではないかと思えます。

(委員)

3-2-②、教員の評価というポイントだと思うのですが、やはり私どもも教職員の評価ということについては非常に神経を使っているところでもあります。一番大切なのは、評価をどういうねらいのもとに行っていくのか。1つはやはり、教職員の資質向上を求めていくということなの

だろうと思うのです。評価に基づいてどこに課題があるか、そのことに対してどのように改善を求めていくかというあたりに、91ページの評価結果などではもうちょっと具体的にお答えいただけるとありがたかったかなと思います。表彰とかフィードバックという形は見えるのですけれども、さらにその辺を改善していただけると、ねらいに即して、もうちょっと見えやすいのかなと思います。

(委員)

今、校長先生と先生たちの面談というのは年何回ぐらい。1回ですか。

(本校)

1回です。

(委員)

うちは何だかんだと4回か5回やらなくてはいけないのです。それだけで大変なのですけれども、90人ぐらいいますので、やると1週間かかってしまうのですが、ですから、そうするとそのときに行ったり来たり、話が聞けるので、もしかしたら、評価とは別に、そういう機会をもうちょっと持たれてもいいのかもしれない。4回とか5回とはいいいませんが、もう1回ぐらい。お互い忙しいですから、なかなか大変なのですよね。

(委員)

やはり私どもも中間面談というのが入っています。そして、評価者は1次評価者、2次評価者と。ですから、例えば年間3回やっても、6回ぐらいとかという形になっていくのだと思うのですけれども、ただ、職員数が多いですから、具体的にどうやるかということはまた別な問題なのだろうと思います。

(委員)

表題の中のもう1つの項目である教育支援者のことについてちょっと質問させていただきたいと思って、論点を変えて済みません。こういう工学系とか技術をやっている学校では支援者が、自己点検書を見る限りは、技術士の資格をもっている方が結構いらっしゃるというのは非常にびっくりしたのが正直なところ。ということは、恐らく、もとの出身は企業に属している方が多いのだなということは理解できるのですけれども、引き続きそれが望まれるものですか。要するに、割と教育に特化してしまっている、あるいは研究に特化してしまうと、どっちかという、そっちのほうの評価、点が多くなってしまうので、採用する場合は特別な枠を設けて技術支援者を採用なさっていると理解してよろしいのですか。

(本校)

技術職員は技術職員の枠でやっていますので、そういう意味ではそうですね。おっしゃるように、技術レベルもかなり高いし、基本的には実験、実習等の準備とか指導に当たるわけですが、自らも工夫して研究するというのも結構やっております。

[4章]

(委員)

ありがとうございます。それでは、次へ行ってよろしいですかね。  
では、4章のほうは学生の受け入れです。

(委員)

多分ここは、今現在は妥当な線でいっているのだろうと思うのですが、少子化ですとか、さっきもちょっと出ましたけれども、特色化の話ですとか、今後のほうが大変なことが起きてくるのかなというような認識をもっております。

(本校)

全国の高専を見ますと、やはり定員割れのところも出つつあるのです。我が校は幸いそうはなっていないのですけれども、やはり15歳人口がどんどん減っていくのに高専全体は定員が動いていませんので、総体的には厳しくなってくるわけです。

それと、あえて言うと、昔の15歳と違ってみんな幼くなっていますので、目的意識がくっきりしているかどうかというのと、目的意識を持っていても、入ってきたときに本当に適応能力があるのかという問題があつて、やはり先生がおっしゃるように、ますます厳しくなってくる。

(委員)

いろいろな意味で厳しいですよ。今、おっしゃったように、実は私、11期なのですけれども、あのころ、ばかだ何だと言われていたのに、数年後、学校へ行ったら、おまえらのときはよかったといわれるのです。今の子どもたちは本当、先生おっしゃるように、幼くて困るというのが、行くたびにそれをずっと聞かされています。ですから、また先生方の別な意味の手間が、そっちのほうがどんどん増えていっているのかなど。一方では、少子化の話もあつて、特色を出せとか、そうしないと潰して全体数を減らすとか、そういう話に多分早晚なつてきますよね。

(本校)

なりかねないですね。

(委員)

ですから、そういう意味では、今、定員割れしていなくて、専攻科に進まれる方もこれまた一定割合ちゃんとおられたりしているので、これをどうやって維持していくかというのが非常に大事なことなのだろうなと思つて採点させていただきました。

(委員)

ありがとうございます。

(委員)

いわゆる学力低下の問題がございましたよね。教える内容が少なくなったわけでございますから、同じボリュームのものを過去と比較すれば、学習していない部分については学力が低下しているわけだと思つたのです。ですから、そういう意味では、例えばたくましく生きる能力が子供たちにどのようになつているのかということについては、その辺を差引いて考えていかななくてはならないのではないかと。

それともう1つは、今、少子化の問題が出ていましたけれども、やはり大切に子育てが行われている。例えば小学校の運動会へ行きますと、1人のお子さんに、お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、おじいちゃん、おばあちゃん。町の中、皆さんもご存じだと思つたのですけれども、例えば小山市内で言いますと、いわゆる新市内と言われていた部分については夏など夕刻になるとお母さん方が集まってくる、昔の下町の良さが残っているのです。一方、農村部に入っていきますと、広い屋敷の中で、そういった方がいたら大変失礼な表現になっていると思つたのですけれども、大事に囲われて育っている。そのような背景のもとに、今の子どもたちというのは価値観の多様であるとか規範意識の低下であるとかいろいろなことが言われますけれども、基本的に心優しく思いやりのある子が育っているのだろうと思つたのです。

やはりもう1つ、最初にお話しした問題と今の問題をひっくるめて考えていきますと、もっと子供たちが体験を通して学んでいく機会を増やす必要があるのではないかと。例えば小山市内ですと田んぼの学校、はだしになって先生と一緒に田植えをやるとか、それを収穫するとか、下手でもいいからそれでコメをつくって食べるとか、何が体験というのは別問題としまして、その辺のところからこれから義務教育では力を充てた教育を進めていかななくてはならないということが言われているのだろうと思つたのです。

いい子どもが多いですよ。ご厄介をおかけしている子どもも多分いるのだろうと思つたのですけれども、ですから、別な見方をすると、心優しく思いやりのある子どもたちがたくさん育ってきているという表現もできるのではないかとと思つております。

[ 5 章 ]

(委員)

ありがとうございます。それでは、第5章に移らせていただきます。第5章は教育内容及び方法です。膨大な量かとは思いますが、いかがでしょうか。——どなたかインターンシップのことについて書かれていましたね。

(委員)

私のほうでインターンシップを。こういう高専の特異性から考えれば、社会とのかかわりという部分を通常の一般の高校と比較しますと意義があるのかなと思っているのですけれども、そうであるならば、それへ参加した者への優遇的なものというのを何か考えているのでしょうか。その辺がちょっとわからなかったものですから、私も評価のしようがなく、ちょっと辛口で評価をさせていただいたのですけれども。

(本校)

インターンシップですけれども、インターンシップは1週間といいますか5日間行って1回報告ということで1単位というものを与えているのですが、むしろそれよりも、これまでは、就職難になりつつあるといわれていますけれども、まず4年、学校にいるうちに早目に、企業とは何をやろうとして、どういう人を求めている、何が基礎として重要なのか、実際にその人たちと話をして吸収してこいと。あるいは大学へ行くときも、ただ大学ではなくて、あの大学ではこういうことをやっているのだから、あそこでこういうことをやりたいと実際に目でみてきて進路を選んでくださいというのを前々から強く言っていたのです。

ただ、数字でみますと、実は昨年度までは4年生は60%いなくて、59%ぐらいしかなかったのです。ところが、今まで言い続けてきたのと昨今の状況もありまして、今年はかなりのが、70数%いくように急に増えました。これはやはり学生もそういう伝えていることが、単位ではなく、件数ではなく、自分に必要なのだということが大分理解してくれていると。それは3年生ぐらいから、授業中でもそういう話をしていると、やはり感觸的にわかってきていますので、これからはもっと伸ばして、事前に自分のやるべきことを自分なりに吸収して、自立して、インターンシップの意義をもっと理解していってくれたら私どもはうれしいなど。今、間違いなく伸びておりますので、私は点数よりもそちらのほうを期待しております。

(委員)

インターンシップにつきましては、3年前にキャリア推進室というのが立ち上がりまして、その中で学生さんへの呼びかけ、それから受け入れ先を開拓するというので、相当多くの受け入れ先をお願いしております。今後、恒常的に、学生さんの希望があればそちらの受け入れ先が受け入れてくれるというような素地はもうでき上がりました。その結果が昨年、7割近くまで上がったとは思っているのですが、各教科によりましてインターンシップの重要性の捉え方がちょっとまちまちかなと思います。今、キャリア推進室のほうで一元化してインターンシップの斡旋というのがなかなかできない。それぞれ先生の1つのつながりで企業をお願いしているというような状況もありますので、それはそれでよろしいのですが、その辺の一元化した中でいうと、もう少し上がるのかなと思います。

インターンシップの目的は、今言ったように非常に深いものがあるのですが、中にはインターンシップ即就職というようなことに結びつける生徒さんもおられますので、インターンシップの受け入れ先も結構幅広く今お願いしているというようなことで。

(本校)

言うのを忘れて済みません。確かに学科間のばらつきはまだ少しあるので、もう少しいろいろと全体に広げていきたいと思っておりますので、今後ともよろしく願います。

(委員)

ご協力のほどよろしく申し上げます。内容はそんなことで。

(本校)

ちょっとつけ加えさせていただきますと、企業さんの理解が増えてきたということなのですが、これは今おっしゃったキャリア推進室の成果なのです。そういう予算どりをしてコーディネーターをお願いして拡大と学生の面接教育を進めたこの2、3年の成果なのです。

ただ、つけ加えさせていただくと申し上げたのは、残念ながら、継続性ということに関しますと、今度は予算の問題が発生してきます。つまり、この2、3年はそういう予算どりができて、本当に充実した活動ができた。ただ、継続性ということに関しては、今後、やや問題もあると。

(本校)

でも、道をつくっていただいたから、かなりいけると思います。

(委員)

私も実は大学でインターンシップを工学部の中で生徒を送り出すという仕事をやっているものですから、なかなか学生がそういうほうに意欲的に取り組むかという問題と、それから受け入れ先という問題と、いろいろ承知しているつもりでございます。やはり我々もやっていて、まず学生さんに、今までの彼らの人生の中でまだ社会について知らない部分があるのだ、将来の仕事であるとか技術者であるということに関してそれなりのイメージはもって、あるいは学校の勉強の中で考えてきているつもりになっているのかもしれないけれども、まだまだ君たちの知らない世界があるのだという形での、先生方から背中を押してあげるといのが、彼らがインターンシップへ行ってみようという意欲を出すまず第一歩であると思いますし、キャリア推進室を初めとしてその成果が出てきているというのは大変喜ばしいことだと思います。

ただ、継続性ということに関して言うと、これはやはり学校側だけの努力ではなかなか難しい部分があって、企業さん側、産業界側から教育に対しても産業界がコミットするという機運をぜひつくっていただいてやっていただけると、コーディネーターの任用であるとか、そういうことの費用的な面に関して小山高専さんがひとりで全部かぶるのではない形というのを目指していただければよろしいのではないかと思います。

(委員)

内部評価の173ページ、5-2-③という項目の評価結果の中の下2行なのですけれども、インターンシップの終了後に報告会を行うことで、新しく得た知識と経験を整理するとともに他の学生へ伝える機会を設けるといった活用を行っている。この共有化というのはとても素晴らしいことだなということで勉強させていただきました。今後ともよろしく申し上げます。

(参考 自己点検評価報告書 p.173 9~10行目)

インターンシップの終了後に報告会を行うことで、新しく得た知識と経験を整理すると共に他の学生へ伝える機会を設けるといった活用を行っている。

(本校)

これは、4年生でインターンシップに行きます。インターンシップに行った報告会を3年生に向けてします。ということで、3年生は3年生の段階で、4年生になるとこんなところへ行くのだというこのメッセージになるということです。

(委員)

ちょっとその部分で、私は、今おっしゃったように報告会は素晴らしいと思うのですけれども、評価の中では、その報告会で報告を受けた側がどのように、あるいは報告した側でも、行ったことによってどういった形での経験を得たかといったような、そういう。これはただ、どこの企業に対して行きましたという資料としては載っているのですけれども、それに対して受け手側とかにどうフィードバックされてきたといったものがこの資料の中にもう少し出ていると、先ほどおっしゃっ

たような7割り近く来ている中で、次につながっていくのだという部分に理解がつながると思うのです。ここでは資料的に事実だけがあったものですから、さらにもう少し資料をいただけるとういかなと思いました。

(本校)

実際には、インターンシップ報告のフォーマットがありまして、そこに記載して、各学科でちょっと違うかもしれませんが、そこには行った先、やった内容を書いて、相手方の評価ももし得られたならばそれをもらえという形です。それに対して我々教員が聞いて、あるいは3年生からも質問を投げかけて、1人5分から10分ぐらいかけて報告をさせるという形になっております。

(本校)

学生への後押しという点では、先ほどおっしゃった、我々の後押しも必要なのだけれども、先輩が行ったというのをみて、我々も続こうという後輩たち、これが結構な後押しになっているのです。

(委員)

まして1学年上ぐらいの先輩がこういうことをしたという、すぐもう。

(本校)

そうなのです。

[6章]

(委員)

ありがとうございます。それでは、第6章に移っていいですか。第6章は教育の成果です。よろしいでしょうか。どうぞ。

(委員)

6—1—①のところで私もちょっと書かせていただいたのですが、授業科目ごとにいろいろな教育目標があって、その達成度の評価の仕方に関しても明確にシラバスによって行われているということはもちろんそうなのですが、進級、卒業、修了の際の最終的な判定のときに、教育目標に対して総合的な達成度はどうなっているのかということに関してどのようにお考えなのか。例えば、JABEEなどではその辺はきちんと明確にするようにという話もありますし、学科によってもスタンスは少し違う部分があるかと思うのですが、いかがなっていますでしょうか。

(本校)

今は基本的に、卒業の認定は単位数で行っているのですが、それぞれの学科ごとに修了した単位数が160単位以上と。それが満足されているかというまず1つは判断と、その中にも実験等のもちろん必須科目もきちんととられているかと。そういう最低限必要な科目と単位数とをもって一応その学科は認めているというようにして、今、まずは最低限そこまでは判定材料とはしております。

(本校)

あと、何年か前に受けた機関別認証評価で、達成度という点で何%、今おっしゃったように、単位数をちゃんとクリアして進級しているよ、進級している学生が90何%いるよという数字は出せたのですが、留年してしまったり進路変更する子は別にして、実際にその子が確かに単位を着実に獲得して進級したり卒業したりしているのかという、その証拠が非常に不確かな部分があったのです。そこで、その当時の教務主事を中心にして、どういう変化を起こしたかという、1年から2年、2年から3年、3年から4年となるのは、細かいことは申し上げませんが、確実に全部単位を取得して進級していると。そうしないと留年になってしまうという、教育の単位取得のシステムを少しずつ変えたのです。そこで4年生まではほとんど用意されたカリキュラムを全部消化しているということに今現在はなっております。

(委員)

274ページのあたり、あるいはその前のページもそうですけれども、今、栃木県知事も若者のグローバルに対応できる能力を持つ人材を育成したいということを言っているわけです。このインターンシップの中での企業側のアンケートから見ても、高専の生徒に専攻の学ばなければならない中で、そこまで求めていくというのはいかがかなとは思いますが、今言ったようなグローバル社会を見据えた人材育成という部分にもう少し力を注ぐことが可能なのか。先ほどの274ページの表の右のインターンシップ受け入れ学生の資質・能力という部分で、これは恐らく企業側の評価だと思うのですが、そこでも国際感覚が豊かであるということについてちょっと低いのかなと思いますと、栃木県も期待している方針との中で、そういったところに力を注いでいただけないのかなとちょっと思ったところなのです。

(本校)

まず1つ目ですけれども、正直言って、一般的に、高専というのは通常で言う英語力がこれまでちょっと低いと。これはご存じのように、どうしても専門科目を早目に押し込んでいる関係で、英語の時間数が少ないということと、大学入試がないということで、語学のモチベーションがちょっと低いかなど。ほかの大学を出た人に比べたら確かにある程度低いというのは今まで言われておりました。

それでも、一応そういう基本的な英語教育はやっているのですが、実際、昨今、それとは別に英語でのコミュニケーション能力が非常に言われているというのを我々も痛感しております、前々からいろいろと国際交流をやらうとは言っていました。今年度から、皆さんご存じのように、新しい学科、電気電子創造工学科をつくる時に、能力を伸ばさなければだめだ、せめてこの学科だけはということで、まずインテンシブイングリッシュ、1単位増やしまして集中英語講座、基本的にネイティブというか日本人でもいいから英語ペラペラな人を入れて、ドント・スピーク・ジャパニーズでやらうと。1週間詰め込み、今ちょっとばらばらでいろいろ、とにかく1週間分やります。それを今年から始めまして、それを3年間プラス2年間。3年間はマスト、さらに2年間は選択で。

さらに3年生からは、今度、しゃべれるだけで英語論文を読めませんも工業高専としてはちょっとまずいので、やはり英語で論文を書けて、英語で発表ができて、英語でQ&Aができるということでやるために、3、4、5年と電気電子英語ということをやろうというシステム構成で、まず教育という目ではようやくスタートしたという状況です。

もう1つは、国際交流という目で、なかなか他の高専までまだ追いつけませんけれども、校長先生とかにいろいろと東南アジアに行っていたりして、ようやく国際交流、香港VTCというところが今年の5月に学生等含んで20人ほど来られました。これが正直いいまして学生に物すごいインパクトを与えたと思われまます。がらりと学生のスタンスが変わりまして、今まで英語なんてといたら論文ぐらいとは言っていたのですが、まず1つは、教育的にも卒研はある程度英語で書きなさい。1ページ英語で書きなさい。これからはアブストラクトを英語で書くようにするからねということも言っていたりもしていますけれども、何よりも、今言ったように、異国の学生が来て、自分の英語がちょびっと通じた、よかった、よかったと。通じなかった、残念だと。そういういろいろな自分の起こしたアクションに対してレスポンスがちゃんとあったかなかったで、その人は友達が1週間できてしまって、この3月に遊びに行くのだとか、そこまで行く人、あるいはすぐに英会話学校に行っている学生とか、そのように学生自体のモチベーションがかなり上がってきて、これを機に、校長先生にももっと広がりをつけましょうということで、ようやく国際プログラムに対して少しずつ、私は確実に上向きに上がってきてよかったと思っております。来年度もまた香港VTCを招くとともに、こちらに行くという方向にして、本当に学生同士、生で向こうの学生と会わせたい。俗に言う、ペラペラ英語をしゃべれなくても、英語を使ってきちっと自分の話が友達にできる、同学年にできるという自信をもたせて、それがいずれは伸びるのだろうということで、正直、今年からかなり力を入れておりますので、来年、あるいは次回、また協力をよろしく願います。

(本校)

つけ加えますと、後援会のご支援を特にいただいて英語研修を、年間20人ぐらいですけれども、

外に行って研修するとか、まだばらばらですけれども、外国で我が校の専攻科の学生等が英語で論文発表するという機会がちょっと増えています。それから、先生方は毎年ほぼ1人、在外研究員で1年近く行っていますので、特に専門の先生は、もちろん論文は書けますし、実際に英語で授業ができます。

機構としては、英語で授業ができる教員をもっと増やせということで、かなりいろいろな圧力がかかってきていますので、それもやり遂げていきますし、あと、この場で言うのは悪いかもしれませんが、ロボコンをアメリカに派遣するという話も少し具体化しつつあるということで、いや応なく外国と接触せざるを得ないという状況が生まれております。

(委員)

今回の点数をつけながら、実は前回のプレゼンもあった、今年だったけれども、このスコープに入っていればよかったのになと思いつつ実は採点させてもらったのが私の実感です。

(本校)

そうですね。25年度から特にグローバル化の話は具体的に見え始めましたね。

(委員)

私の経験だと、さっき海外に行かれるという話をしましたけれども、そこにほっぽり出されるとやらざるを得なくなるという実態はあるので。私も英語はだめでしたが、ある仕事でドイツのシュトゥットガルト大学へ行って、せっかくだから時間をやるから何かしゃべると言われるのです。そうすると、何かしゃべらなくてはいけないので、やはり何か考えますよね。というのがあって、そういう機会を与えられるというのはすごく大事なのだろうなと思います。ですから、向こうから来て、一言でも通じるとそこから始まりますし。

(本校)

特に先生方ではなくて、同年代で、向こうはうまいのですけれども、片言英語が通じて意思が通じたことがうれしくて、ちょっとずつ話すようになって、帰るころにはもう友達になっていると。それが国際化というか、コミュニケーションがとれて非常にうれしかったという、そのインパクトが大きいようで。

(委員)

ですから、1つは、コミュニケーション能力が非常に大事だと私は思っているのですが、一方、就職とかになると、何人かの方も書いていらっしゃるけれども、TOEICの点数が800だとか750だとか、例えばそういうのが一方で第一関門を突破するためには出てくるので。

(本校)

そのあたりも、TOEICの受験率は受験料もありましてちょっと低かったのですが、今年校長にお願いして団体協賛員になりまして1,000円安くなります。1,000円安くなったから、おまえら、どんどん受けてると言ってハッパをかけていまして、これも残念ながら今年からなのです。だから、今年から伸びてくると思っています。

(委員)

では、今回は楽しみがいっぱいあるということで。

(委員)

こういうことを言いたいなと思っていたことをみんなほかの委員の先生が言ってくれたので、まとめとはならないのですけれども、やはり若い学生さんたちには異国の人が自分の身近に来た、あるいは会ったということが非常に大事で、多分、高専の学生さんだったら火がついたら自分でできると思うのです。私は時々、何かで発言を求められたときには、1週間に1時間、英語の授業をやっただけでは、とてもコミュニケーション能力などつかない。だけれども、大事なものは刺激を与え

ることで、その火がつけば、今の若い学生さんたちは先生の範囲を超えてしまって勝手に伸びていきます。だから、そうなればしめたもので、今すばらしいなと思ったのは、最低何人かの先生が向こうに行って1年間で習得して英語ができる先生が増えてきていると。これが最初の火つけだと思って、その後は香港から20人ですか、来られたというので、非常にすばらしい環境に育っているなと感心しました。

[7章]

(委員)

よろしいですか。——ありがとうございます。それでは、第7章です。今のお話の中にもかなり出てきていると思うのですが、学生支援です。国際化のところでも結構出てきましたけれども、いかがでしょう。

(委員)

ここも、先ほどのところと逆に、(留学生を)受け入れている人数。312ページに受け入れの人数があるのですが、これをどのように捉えたらいいのか、多いのか少ないのかちょっとわからないのですが、先ほども学生の刺激という部分、また相手から来る学生側も高専に対してどのようなアクションの中でここを選んで来るのかというのがちょっとわからないものですから、判断というのの適否というのはつかないのですが、学生を受け入れることによって接触する機会を設けて、学生の刺激という部分においてもっと受け入れる素地はあるのかどうかというのをちょっとお伺いできればと思っているのです。私としては、ちょっと少ないかなと思ひまして、評価は3点にさせていただいたということです。

(本校)

1つは、確かに留学生はそれほど多くはないのです。ですが、全国的にみると少なくはない。ただ、若干問題なのは、留学生がみんな日本語が堪能でして、日本語で交流しているのです。ところが、彼らは母国語はもちろんですが、英語も堪能なのです。その活用がちょっと無いなということと、もう1つは、実はこの7章にもかかわるのですが、我が校は寮に入る割合がほかの学校と比べますと少ないのです。それは交通が便利だということが一番大きい理由なのですが、それで今、ほぼ1棟空いております。それを留学生と国際交流の会館にしようということで2年ほど前から構想を出しては、本当言うと、今度の補正予算でとれるはずだったのが、ちょっととれなかったのですが、高専機構は小山高専が最初に手を挙げているから何とかやってやろうではないかという感じですので、それができますと留学生が倍増する。それから、国際交流の中身が倍増する。つまり、例えば香港からおいでの子供とか教員に泊まってもらって、一緒に合宿ができるということになりますし、私の勝手なあれですが、そういうことだったらこの際、市民が自由に出入りできるような建物にしたいというようなことも思ったりしています。そういう構想をもって、行くだけではなく、迎え入れるほうでしっかりやっていきたいなと思っております。

(本校)

というように、本当はもう少し留学生も増やして、大きく言えば、留学生と学生との輪、留学生と一般市民との輪、それから、もう1つ、校長も言われましたけれども、向こうから例えば関東に来る留学生の泊まる場所は小山にして、そこから各高専に移動するとか、そういう留学のハブ的な高専にもしできればいいな、そうしたいなというところで、今一生懸命やっているところです。

(本校)

ちょっと余分な話ですけども、全国の高専で小山高専が東京が一番近いのではないかと思うのです。東京高専は結構遠くにありますが、ですから、いろいろな意味でハブ的なものになり得るのです。

(委員)

道路も整備されましたね。

(本校)

そうなのです。いろいろな面でいいのです。

(委員)

大きなお世話かもしれませんが、実は小山も、ここで見ますと余り英語圏というか少ない状況で見られるのですが、小山もオーストラリアと姉妹都市をやっていますので、中学生、高校生というか、向こうも高校生でも若い生徒を日豪の協会から送っていただいたりしているのです。ぜひもう少し上の年代を今後は向こうから高専のほうで受けていくような形の中の……

(本校)

そうですね。おいでいただいて交流したらいいと思います。

(委員)

やっていただければということで、私からもちょっとアクションして、ご検討いただけないかみたいなことでもしてみたいなと思っています。

(本校)

ことしも、先ほどから申しています香港からの学生、英語をしゃべる人間ばかりですが、それを迎え入れる計画もありますし、トルコから先生が研修に来たりとか、いろいろな話がありますので、今でも数人ぐらいだったら寮を中心にして泊まれますが、先ほどのセンターができるとその何倍かは可能になりますので、そういうことをやっていきたいなと思っています。

(委員)

あと、私、総論のあれを見たときに非常に感銘を受けたのですけれども、ちょっとご披露いただければありがたいのです。グローバル人材の意味とはこういうものだよということ。

(委員)

世間的にも、日本政府の政策的にも、グローバル人材という言葉はよく使われるのですが、そこで言うコミュニケーション能力というのは、直感的には英語を初めとする語学力であると理解されますけれども、やはり工学の分野においては言葉以外のいわゆるコミュニケーションの能力が非常に重要視されるは当然で、図面であるとか、プログラムのフローチャートであるとか、そういうものがきちんと書けると。これは日本での教育できちんとやっている部分でありますけれども、それが彼らが海外に出て仕事をする際にも非常に大きな武器であるという意識を彼らが自覚を持ってもらおうと、それをもとにして彼らとコミュニケーションできるのだということでもまた大きな自信につながるのではないかと。英語はやはりちょっとおっくうだなという生徒さんも、例えば、これは僕のアイデアだと言って図面を何とか説明する。そのことによって、向こうの生徒さんがこれはいいと言ってくれるということがまた自信になるとか。

そういった面で、国際交流が非常に活発になってきたというご報告で、非常に頼もしいなと思っているのですが、いろいろな機会の中で、今こちらに既に来ている留学生の方は日本語が堪能なのでというご説明がありましたけれども、でも、例えば他国からの人が来たときに、小山高専さんに来ている留学生がやはり日本人との仲立ちとして、また触媒的な作用をして、そうすると、ふだんは日本語で彼とやりとりしているのだけれども、その彼が英語をすごくよくしゃべるし、例えば最後の発表会みたいなものを日本語と英語と両方でやるとか、そのような仕掛けがあると、また日本人の学生に対する刺激になるのかなとも思います。今、非常に発展性のある芽がいろいろたくさん出てきている、非常に頼もしい状況にあるかなとも思いますので、ぜひ頑張ってくださいと思います。

(委員)

ありがとうございます。どうぞ。

(委員)

国際感覚を身につけるということと、英語力を高めるということ、これは全く同等の意味なのですけれども、私、交換学生を受け入れたりなんかいろいろな機会をやっているのですが、日本の若者は、まず英語がそうなのですが、自分の考えが、いわゆる日本人であるという自覚がちょっと足りない。日本人はどういうのですかと聞かれても、全く答えられないというような形です。きのうあたりのイタリアのサッカーのインタビューをみると、本田さんですか、サムライということが出ましたよね。彼はなかなか上手で、私はサムライに会ったことはないなんて言っていましたけれども、少なくとも、日本人の一般的な気持ちというのが学習していないと、英語力があって相手にわからせる表現ができない。そういう肝心な教育がちょっと今欠けているのではないかという気が私はするのです。

この学生支援に関しましては、いわゆるカリキュラムを通した技術的なものというのは高専においては全く100%生徒に施していると思うのですけれども、339ページにありますように、クラス担任によるホームルームでの取り組みというのが、他のそのような精神的なものについてはそこが主なのです。そのホームルームがどのように行われているかというのが私はよくわかりませんし、小・中学校、一般県立高校のホームルームとはちょっと異にしていると思うのです。高専に入る生徒さんの精神的に一番大事な時期を、技術一本でいきますので、いわゆる精神的な面で相当負担を感じているのではないかと私は思うのです。

このページにも書いてありますが、特に精神面での学生さんに対応するために専門のカウンセラーを配置しているということで、まさに結構なことだと思うのですけれども、この辺を怠りますと、いびつな人間が将来できてしまうという懸念がありますので、これについては今後、十分考えていただきたいと思うわけです。どこの学校でもこのような事件事故というのではないわけではないのですが、特に生徒に関してそのような問題があったとすれば、これは十分にその面をさらに重要視してやっていかないといけないのかなということで、このような精神面の扱いについては私は厳しい点数をつけさせていただいたのです。特に中学卒業から一直線に技術に行く、一般の小・中学校、高校の学生指導要領からちょっと離れたところへ進みますから、やはりその辺がちょっと不安かなというような気がいたします。

(委員)

ありがとうございました。はい。

(本校)

確かに10年ぐらい前の学生ですとそんなことはなかったというようなことが、先ほどから幼いという表現で出てくるのですが、その辺も含めましてホームルーム等も充実を図りながら、メンタル面のサポートということで、体制としては充実を図ってきているつもりでございます。ただ、実質、その結果、本当に悩みが解決して、いい方向に行っているのかということ、そこまでのところはまだまだ難しいかなとも思いますので、また一層考えながら進めていきたいと思っております。ありがとうございます。

(本校)

大変デリケートでして、ある面、かなりウイークといいましょうか弱い部分がありますので、それを学校がちゃんと受けとめて、カウンセリングなりヒアリングなりを日常的にやる必要があります。どこかに資料があると思っておりますけれども、保健室でのいろいろな相談というのはすごく多い。多いのは、そういう事象が多いということもあるのですが、積極的にそのように学生に働きかけるから多くなるのです。それは他の高専よりもかなり多いのではないのでしょうか。ただ、それでもやはりいろいろなことは起こってまいります。

(委員)

多分、そのお話をすると非常に長くなってしまうと思うのです。

(委員)

この辺で。

(委員)

いや、やめなさいという意味ではなくて、やめたいと思ってはいないのですけれども、お話に出たようなそういう幼くなった。幼くなったということは、逆に言うと、伸びしろがあるというように理解しているのですけれども、途中で挫折して折れてしまうというのが一番残念だなと私は思っているのが大分ありますね。そうすると、それこそ、地域の方と逆に言うとそこでも接点が出てくればいいなと個人的には正直思っているのです。教員で24時間ずっとケアするわけにいかないし、地域の総合力がそこにも効いてくるのかなとちょっと期待しているので、大森委員のほうにもよろしくお願いしたいと。

それでは、よろしいですか。どうぞ。

(委員)

私の理解は、学校側の準備立ては非常によくできていて、特に図書館とかその辺は、学生のほうがちちゃんと使っているのかなというのがあって少し点数を下げさせてもらったということが1つ。

それから、部活のことを書いていますが、昨日、ヤフーだったと思いますけれども、私はびっくりしたのが、ラグビーの高専大会の決勝が決まりましたというのが出ていて、最初、目を疑ったのです。高専の全国大会の決勝がそういうところに載るのだというのにまずすごくびっくりして、ですから、部活も、吉澤委員のところにも書いていただいているように、資金的な援助。私も昔、部活をやっていて大分いただいたのもあるのですけれども、ロボコンだけではなくて、何かもうちょっとメディアに載せてもらってもいいかなというのをそのニュースを見たときに。下野新聞は結構書いてくれたりしているのかもしれませんが、全国的にみるとなかなか。高校ラグビーとかサッカーだとあれだけ取り上げていますけれども。

(本校)

なぜかラグビーは載るのです。私も不思議なのです。

(本校)

ラグビーはラグビー協会が末端の大会まで出すという方針らしいのです。ですから、小さな大会でも出るような仕組みになっています。サッカーなどですと温度差が大きくて、末端の大会はなかなか出してもらえないのです。

(本校)

残念なことに、うちはラグビー部がないので。

(本校)

最後に、とにかく学生支援は教職員、私たちも頑張っていますけれども、後援会のほうには、先ほどの部活での遠征からプロコンとかロボコンの遠征、それから英語の研修、外への英語での発表とか、本当にいろいろな面で支援していただいていますので非常に助かっております。ありがとうございます。今後ともまたよろしく申し上げます。

[ 8 章 ] [ 10 章 ]

(委員)

ありがとうございます。それでは、次の章に移らせていただいてもよろしいですか。

次は8章なのですが、施設と設備、それから、大変失礼ですけれども、時間の関係上、10章の財務も一緒に見ていただけませんか。ただし、その間に1つ、9章が入ってしまうのですけれども、8章と10章。

1つだけ、ほかの委員の方々の表現を借りると、財務諸表等が例えば公表されているか、あるいは機構本部での開示となるかというようなことの公表の点をお二方くらいがご指摘されているので

すけれども、いかがですか。

(本校)

これは機構全体として出しているわけですよね。これはホームページ等でも出していますよね。ただ、わかりやすいかどうかというのは別な話ですけれどもね。

今のご指摘のことで直接関係ないかもしれませんが、ちょっとだけ申し上げますと、高専の施設が50年近く前にできて、それから少しずつ改修もされ、耐震強化もされていますが、全体的には施設が陳腐化しているのです。その根本的な改善というのが、今の高専機構に与えられる財政状況の中で非常に難しいのです。大学等は大学法人として個別に法人になって、そのあたりがかなり改善されてきているのですが、そのあたりで教育内容ももちろんなのですが、施設において大学だとか工業高校だとかそういったところと対抗できる内容になっているか、つまり魅力ある施設となっているかというのは大変大きな問題で、いろいろ提起しているのですが、なかなか簡単ではない。ただ、それをしないといけないなと思っています。そういう面では、一生懸命予算をとるように頑張っていますけれどもね。

[9章]

(委員)

よろしいですか。時間が大分超過しているので、ちょっとスピードアップします。

それでは、外しました第9章です。教育の質の向上及び改善のためのシステムということについて。

(本校)

これに関連しましては、先ほどもちょっと言いましたけれども、何年か前に受けた機関別認証評価でその部分も指摘されたのです。それは、言葉で言ってしまいますと、FD活動も含めたPDCAがきちっと回っているかという指摘なのです。それは、その何年か前から認証評価の受けた後から、さらに意識してPDCAを回しているという事実を残していると言いましょか、いいわけがましく残しているだけではなくて、きちっとそのサイクルをやっていますよという事実を積み上げている。つまりシステムとしては今できているということは事実なのですが、もしかすると、本当にどこまで成果を上げているのかということまで言われますと……。

(委員)

改善活動はされているというようには見てとれますよね。

(委員)

仕組みがちゃんとあって、それが継続的に活動しているということが多分重要なのだと思いますので、直接の成果がこれであるということがなかなか示しづらいのはよくわかるのですけれども、それが無いからといって、まずいという話ではないのかなと思っています。仕組みがちゃんと運用される、それを記録にとっちらっしゃるということであればよろしいのかなとは思いますが、1つだけちょっと気になったのは、いろいろな教員間の連携的な組織といいますか、意見交換等はこの前のほうの資料を見てもやられていらっしゃるということがよくわかるのですけれども、パーマナントなそうした連携を促進するような何か組織とか集まりであるとか、それはFDの行事とかそのような形で何かやられていると理解してよろしいのでしょうか。

(本校)

FDもそうなのですが、本校にある組織図と言いましょか校務分掌の組織の中に学科間連携という組織が、この校務分掌はこの中にデータとしてあるかどうかわからないのですけれども、学科間できちんと連携していきなさいという委員会は一応システムとしては、組織としては準備されています。ただ、これもまた、それがきちっと回数多く綿密に繰り返されているかということになると、ちょっと弱いかもしれませんが、組織としては準備されています。

[11章] [14章]

(委員)

あと、ほかにいかがでしょう。よろしいですか。

それでは、時間のかけ方がバランスがとれていなくて申しわけありませんけれども、第11章、管理運営と、申しわけありません、14章の中期計画の達成状況、この2つをもしよろしければ一緒にみていただければありがたいのですが。

(本校)

では、これも私から。ここは項目としては結構たくさんありまして、今のPDCAも含むのですが、先ほど大分前に議論になりましたインターンシップも含めて、産学官の連携というのが割と大きな部分を占めているかなと思うのです。これは、今ここに大森会頭いらっしゃるけれども、第2期中期計画、5年サイクルの中期計画の中の5年目を終えようとしている中で、1つの成果としては、地域連携協力会をつくって地域の企業さんと本校の学生、教員の教育も含めた形でお付き合いをしていこうという、その点では1つの大きな成果を得たと考えております。

ほかに項目で、産学、あるいは官学の連携がどうなのというご指摘が宮嶋委員からもあったかと思うのですが、その辺に関してはいかがでしょうかね。

(委員)

今、関東は、栃木市と昨年、小山市で結ばれましたね。ほかの自治体とはございますか。

(本校)

協定を結んだのは2つだけですよね。

(委員)

何か研究課題みたいなものをお引き受けするというと、さっきに戻りますが、いわゆる利益事業、収益事業もそこで展開できるということもあるのでしょうかね。

(本校)

小山市さんとは協定に基づいて……

(委員)

例の引き込み線の。

(本校)

とか、農村計画の話、あるいはエネルギーの話、いろいろいただいて、非常に我々の刺激になっていますし、何らかの貢献はできるのではないかと思います。これは非常にありがたいことで。

(委員)

地域連携については、今年度がまさに動き出しますので、どのように設立の意義を見出すか、ちょっと圧力をかけなくてはいけないのかなと思っています。

(本校)

たまたまですけれども、地域連携共同開発センターの改修もこの3月にでき上がります。それから、24年度の補正予算等でたくさんの実験機器等も用意できましたので、本格的に地域企業の方にも使ってもらえることになるのだらうと思います。

(本校)

25年度ですので、直接はこの評価書の日程とは違うのですが、確かに24年度の補正予算でかなり大型予算がつきまして、共同センター自体が建物も非常に老朽化していたのですが、機械自体が老朽化していて、先細りの状態だったところで、この機械が新たについたというのは非常に追

い風になっているのは事実です。それで、この3月に竣工式を兼ねまして交流会を実施させていただく予定なのですが、そこでお披露目するとともに、当然、学内の共同利用施設ですので、その利用率を高めるとともに、せっかくの機会ですので学外の方にも使っていただくということは検討しております。

[12章]

(委員)

よろしいですか。

ありがとうございます。それでは、第12章、研究活動。特につけ加えることは、よろしいですか。

(委員)

学生さんの研究発表について、私、ある会合の委員をやっているのですが、あえて1つだけつけ加えさせていただければと思います。

今年は残念ながら宇都宮大学の方にとられてしまうのですが、昨年、小山高専の専攻科の女子学生さんが、立て板に水どころか、立て板に大水ぐらいの、亀の子の長ったらしい物質名をよどみなくご説明いただいて、審査員一同、本当に舌を巻いて聞いていたというのがあります。タイトルだけ読んでも私どもも非常に困ったぐらいの話だったのですが、そのほかに男子学生の方も県内企業と共同研究したりとか、そういうのを対外的に発表していただいて、小山高専が頑張ってくれることによって、宇都宮大学ほか他大学にかなり刺激を与えているな、非常に頑張っているなという印象を私自身は持っています。これをぜひ一言いいたかったということでございます。小山市さんとの協定のときにも説明した彼女でございます。当時、小林先生もご説明するときに大変だったという記憶ももっていますが。

[13章]

(委員)

では、あわせて、残りの13章、正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況。地域との関連も含めてだと思っておりますけれども、あわせて、申しわけありませんが、総論のところというか、総合評価のことについても結構です。残りのところで何かご質問ございましたら、時間が大分過ぎてしまったので、いかがでしょうか。

(委員)

出前授業とかいろいろな行事で学外の方、特に若年の小・中学生とかに対していろいろな教育サービス、イベント等のサービスをなさっていて、非常に活発なと思うのですが、今後の少子化、それからいわゆる理科離れに対する対策として、教育機関としてはこういうことをやれというのが至上命題になっている面があって、非常に数多く取り組まれていらっしゃると思うのです。私も同じようなことをやりながら、本当にこれで効果があるのかというのをいつも、どうやってはかたらいいのかなというのが疑問で、実際にこのようなイベントをこちらがやって、それに来た生徒さんたちが将来、小山高専に入学するとか、小山高専でなくても、理系分野へ進んで活躍するところなどどこまでつながっているのかをはかるというのはなかなか難しいかなと思うのですが、一方で、実際に入学してきた生徒さんたちが小・中学生のころに小山高専なり教育機関なり地方公共団体がやるような理科イベントみたいなものにどういう影響を受けたのかとか、そういうことがわかるようになってくると、だからこういうことをやる意義があるということを経験して社会に発信するということができるのかなと思うのです。その辺、いかがでしょうか。入学してくる小山高専の生徒さん方で入学以前にこのような体験をしてきている方がどれぐらいいるとか、定量的には難しいかもしれませんが、定性的に、いや実はとか、生徒さんが何か言ったとか、そんなエピソードが何かありましたら。

(本校)

1つあるのは、鹿沼で後援会の晃麓支部さんがメインでやっていただいています出前授業に参加した中学生が受けて入ったということがあります。それは1つの例です。

あと、ロボコンのデモに参加して、そこで小山高専を希望しましたという例は非常に多いです。

(本校)

非常に多いですね。本当に多いです。入ってもなかなかロボットに携われない学生が増えているのです。やむを得ないのですけれども。

(本校)

あと、私は物質工学科なのですけれども、やはり小学校の出前から始めまして、その後、酒井先生の小山市の教育委員会さんのほうにお願いしまして、出前授業のプログラムを調整していただいているのですが、個別なのですけれども、例えば物質工学科に入ってきた1年生に対しましてアンケートをとるわけです。そのアンケートの中に、そういう出前実験に参加した経験はあるかといいますと、実は小学校3、4、5年生あたりですので、それが中学を経てここへ入りますので4、5年後で、もうそろそろだったのですけれども、1クラス40人の中に1人とか2人とか参加しましたという子供さんが出てきている事実もあります。だから、本当にささやかな成果だと思っておりますけれども、少しずつ出てきているという。

(本校)

やはり同じような形で、以前、教務の仕事をしていたときに、入学者に対していろいろアンケートをとったりしたのですが、入学を決めた時期が、中学校で決める子もいるのですが、中には小学校で決めている子がいるのです。小学校で高専に入ると決断している。なぜそれをしたかという話をすると、やはりそういったロボコンのイベントであつたりとか、ものづくり教室のイベントで高専を知ったということが、絶対数としては多くないかもしれないのですが、そういう芽まき運動というのでしょうか、それが出ているのかなというのは実感しております。

(本校)

ですから、我々も、中学は大切なのですけれども、小学生が一番最初にいいのかなと思ってまして、文科省とサイエンス・パートナーシップ・プログラムをやったときに、上三川の小学校と一緒にロボットをつくるというのをやりまして、非常に好評だったのです。そんな形もやっていますので、できれば早いうちに方向を決めていただきたいということで（笑声）。

(委員)

そうですね。県内の高校でも県立ですと幾つかスーパーサイエンススクールというように認定されてやっていますから、そちらに行けるのかなという形の前に、こっちで優秀な人材を確保するように、やはりオープンキャンパスなども小学生ぐらいから開放したほうがいいですよ。

(委員)

1つよろしいですか。私が一番感謝しなければならない場面なのですけれども、理科離れということが大人にも子供にも言われているわけですが、やはり理科の授業の中で専門の先生とか学生さんのおいでになって、例えば液体窒素で瞬間的に物をこしたときにパリッと割れる、そういう驚きであるとか、そういうところから子供たちというのは興味、関心を持っていくのだらうと思うのです。ですから、今後ともご支援をいただきたい、またご支援申し上げたいと思っております。

それから、今、会頭さんからオープンキャンパスの話もあつたわけですが、本学の学校祭にあわせてキッズ・ユニバーシティということで、市内の小学生を中にいれていただいて、学園祭の華やかな中で専門の授業をわかりやすく受けられるということもやっていただいております。今後も拡大させていただければと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

(委員)

ありがとうございます。どうぞ。

(委員)

私、ちょっとうっかりしまして、最後の総合評価のところを書く欄を見落としてしまいました、書かなかったのですが、ちょっと言わせていただきますと、今までの評価をさせていただいて、産業界から見た目で申し上げますと、私、小山はものづくりのまちにするのだという意識が強くて、今回、もろもろの年頭所感でも話しているのですが、そういう目的を達成するために、この小山高専というのは重要な位置にあると思うのです。これだけ立派にカリキュラムをして、多くの優秀な生徒を抱えておられます小山高専がこれからもますます地域との連携を深めていくことによって、小山らしく、また日本のものづくりがさらに進むものと思っていますので、ぜひ頑張ってください。評価をさせていただきまして、ありがとうございました。非常に参考になりました。ということを経験で言いたかったのですが(笑声)、コメント欄がわからなかったのです。

(委員)

別シートでしたよね。

(委員)

別シートだったのです。済みませんでした。

(委員)

ありがとうございます。ほかに。時間がぎりぎりになってきましたけれども、どうぞ。

(委員)

余りにも諸先生方が。私、あるときにある先生に、本校をお見せしないで評価されていいのですかという質問をしたら、いや、器が違うから大丈夫だよと言われたのが、今日本当によくわかりました。やはり1週間ぐらいお見せしたほうが、どんなことをやっているというのがよくわかっていただけるだろうから、それこそ学食から寮から何から全てお見せして評価していただいたほうがいいのではないかと。でも、そんな必要、本当に全然なかったですね。本当に素晴らしい評価をいただいて、私、学校側のほうに座らなくてはいけないのではないかなと思っている次第で、本当にいろいろありがとうございました。参考になりました。

## 7. 総合評価取りまとめ(休憩)

(委員)

それでは、よろしいですか。一応これで、短時間ですけれども、休憩に入らせていただいて。では、そういうことで、済みません。

(暫時休憩)

## 8. 講評

(委員)

今、別室で委員の先生方からご意見いただきました。その結果を、今この場では、済みません、口頭で発表させていただきますので、よろしくをお願いします。

講評

総合評価：

工業高等専門学校のあるべき姿、求められる高専生像は、時代の要請により変革していくものと思われませんが、現在の日本における工学教育は、予算、人員面において厳しくなる一方、創造性教育、能動的な学修、グローバル人材の育成など教育内容の高度化と同時に質保証も求められ、かつ教育機関として社会貢献、地域貢献も要求されるという状況にあります。

そのような中、小山工業高等専門学校は、課せられた課題に対してよく対応され、幅広い年齢層の学生に対する教育を実施するために、教育目標、体制、カリキュラム、指導方法などすべての面において多様な取り組みを行っており、工業高等専門学校に求められる目的に沿って学校運営がなされていると判断できます。

特に高く評価する項目：

以下の点を特に高く評価します；

- 1) 明確な教育理念と教育目標
- 2) 技術者育成道場の開設
- 3) サテライト・キャンパスの設置
- 4) 学生のニーズに対応した多様なカリキュラムの実施
- 5) 地域連携共同開発センター、先進的キャリア教育推進室の設置
- 6) インターンシップ参加率の向上

高専卒業生は、活力のある技術者として、産業界からの期待も大きいと思われ、自己点検評価報告書における学外者からの評価でも、その期待に応える教育が実施されていることがうかがわれます。

より一層の向上を期待する項目：

今後一層の充実を図っていただきたい具体的事項として、次の点をあげます。

- 1) 高専生の人間力・社会人基礎力などのより一層の向上：  
昨今の教育界においては、若者の心の問題に注目が集まっており、人間力あるいは社会人基礎力などの向上が叫ばれています。高等教育を受けた人材においても「人間性」は普遍かつ極めて重要な要素です。小山工業高等専門学校には、「技術者である前に人間であれ」の教育の基本理念の下、全人的な教育を目指し、しなやかかつ大胆な運営を期待します。
- 2) 学際教育プログラム：  
JABEEでのエンジニアリング・デザイン教育にあたり、また能動的学修であるアクティブ・ラーニングに相当します。特定の科目に限らず、学際教育プログラムを様々な科目の中に取り入れることを期待します。
- 3) 技術者育成道場、サテライト・キャンパス、インターンシップ等を通じた教育についての地域連携：  
高度な技術教育の実施を図るため、小山工業高等専門学校内の努力だけでなく、インターンシップなどを通して地域社会や産業界との連携により、一層の充実を図ることを期待します。
- 4) 国際化への対応：  
グローバル人材やコミュニケーション能力の育成は、えてして英語教育の充実と解釈されがちです。しかし、工学においては図版、図面、グラフ、プログラムなどは立派なコミュニケーションのツールであり武器であります。学生にそのことを認識させ、国際的な舞台に立つ機会を設けることにより、英語能力や国際感覚にまた違った見方ができ、自信を持たせることを期待します。
- 5) 教員の教育意欲の高揚に繋がる仕組みの構築：  
学生は教員の教育意欲や自信を素早く見抜く力を持っています。実際に学生を育成している教員の教育意欲の高揚に繋がる仕組みの構築も願っています。

平成26年1月9日 小山工業高等専門学校外部評価委員会

以上です。

委員の意見、それから、それに対する皆様方からの回答を聞いて、以上のようにまとめてみました。さらに点検しますけれども、今日はどうもありがとうございました。

## 9. 校長謝辞

(本校)

長時間にわたりましてご議論、ありがとうございました。  
閉会に当たりまして、荻谷校長からご挨拶を申し上げます。

(本校)

本日は本当に長時間にわたりまして熱心なご議論、あるいはご質問等をいただきまして、ありがとうございました。私どもも書類に書けなかったといいますか書き足りなかったような内容についてご説明することができて、大変喜んでおります。

今、特に総括的な評価をいただきましたけれども、本当にありがたい内容がいっぱい入っており

ますし、大変参考になります。我々はこれを言葉だけではなくて、本当の意味のバイブルとしてやってまいりたいと思います。

先ほど委員からおっしゃいました、小山のものづくりの発信地として我が校が改めて存在意義、存在価値を表現し、地域や産業界にとって本当に頼りになる高等教育機関であることを目指していきたいと思います。本日は本当にありがとうございました。お世話になりました。

#### 10. 閉会

(本校)

これもちまして、平成25年度外部評価委員会を閉会いたします。本日はどうもありがとうございました。

—了—



外部評価委員会

## 7. 外部評価用「評価シート」集計結果

(\*)5段階評価 5:優れている 4:やや優れている 3:普通(標準的) 2:やや劣っている 1:劣っている

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等   |
|---|--------------|--|
| 1-1-①:<br>高等専門学校が、それぞれの学校の個性や特色に応じて明確に定められ、その内容が、学校教育法第115条に規定された、高等専門学校一般に求められる目的に適合するものであるか。また、学科及び専攻科ごとの目的にも明確に定められているか。 | 4.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●高等専門学校に適合した小山高専の目的が学則に明記されている。</li> <li>●教育の基本理念「技術者である前に人間であれ」と3項目の教育理念、6項目の教育方針については高く評価できる。目的達成には一般科目の高い習熟度が必要。</li> <li>●法に規定された目的と、本校の教育目標などとの整合性がよく図られている。今後、「本校なり」の獨創性や、時代の変化にどのように対応すべきか検討する必要があると感じる。</li> <li>●学校教育法第115条に基づき、高専の目的に合致している。平成19年に6項目の教育方針と育成すべき人材像を設定し、学生便覧、ホームページ、学校要覧などに記載し、公開するなど教育目標を明確に定めている。</li> <li>●理念・目標・方針が明確である。</li> <li>●高等教育機関として、常に努力致して折ります。多数の方々の御意見も取り入れて、学生達に情報を与え、現代の社会ニーズに合った教育の有り方は、一般公立校では皆無です。</li> </ul>   |
| 1-2-①:<br>目的が、学校の構成員(教職員及び学生)に周知されているか。   | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生便覧に記述があり、周知されているの認識できる。</li> <li>●学生便覧、ホームページにより周知されているが更に周知度を高めていく必要がある。</li> <li>●目的が、構成員だけではなく、「知りたい人間」にも周知できるように工夫されており、内容的確である。</li> <li>●学生便覧、ホームページに加え、資料配付説明、学内掲示、さらに携帯用「教育目標」を配布するなど様々な手段で、教職員及び学生に周知している。今後も特に準学士への周知度向上に努めるとともに、その理解が進むことを期待します。</li> <li>●配布という方法で周知が図られたとするのは、やや短絡的。特に学生には、唱和する時間を定期的に設けることで意識付けが向上されるのではないか。</li> <li>●周知していることと理解されていることは同義ではないと思われる。特に低学年の学生に対して理解させることはなかなか難しいと思うが、繰り返し指導する努力はしていきたい。</li> <li>●教育者に高専卒業生が多いです。血が濃いと思って折りましたが、この3年程で企業から来て頂いた研究者も増えまして、学生も刺激を受けて折ります。素晴らしい事です。</li> </ul> |
| 1-2-②:<br>目的が、社会に広く公表されているか。  | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●目的が社会に広く公表されている根拠を見いだせなかった。</li> <li>●ホームページ、学校便覧により公開されているが周知されているかは疑問。しかし小山市など周辺自治体との連携、ロボコンその他の活動による知名度は高い。また地域連携協力会の発足は更なる周知度アップに貢献する要因になるものと考えます。</li> <li>●方法や内容が工夫され、教育理念等が、関係者や本校に興味のある人間に広く公表されている。今後、一般市民に対する公表の在り方が工夫されるとなおよい。</li> <li>●ホームページや学校要覧に加え、オープンキャンパス・説明会など、意識的に地域との連携がもたれており、小山高専に対する認知度は高まって来ていると思料。今後も継続して頂きたい。</li> <li>●インターネット、パンフレットなどを通じて公表されている。</li> <li>●全国の同世代高専学生数は3%です。加えましてヤスヤス入れる学校では有りません。一般家庭からしますと白い目で見られます。現実で学生達が社会に出てから主役に成って折る様です。</li> </ul>  |
| 2-1-①:<br>学科の構成が、教育の目的を達成する上で適切なものとなっているか。  | 4.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●機械工学・電気情報・電子制御・物質工学・建築の5学科から構成されており、目的を達成するのに適切なものとなっている。</li> <li>●学科の構成は教育目標達成に沿ったものである。</li> <li>●高専設置基準に沿って、合目的な学科構成となっている。</li> <li>●一般科と各専門学科のバランスはとれており、目標実現のために適切な教育編成になっている。今後は、社会環境の変化に対応した時宜を得た運用を図られたい。</li> <li>●設置基準に沿って学科構成が考えられている。さらに新学科の設置など、教育体制の充実が図られている。</li> <li>●今期より取り入れられました学科改組等、積極的に取り組んで頂いて折ります。構内でも最先端です。技術者を養成する場としては素晴らしいです。</li> </ul>  |
| 2-1-②:<br>専攻科を設置している場合には、専攻科の構成が、教育の目的を達成する上で適切なものとなっているか。  | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●1専攻5コースに対応した適切なカリキュラム構成。</li> <li>●専攻科の教育方針や育成したい人物像が明確にされ、目的に沿った設置となっている。今後、社会のニーズや学生の希望などを参考にすることも必要ではないか。</li> <li>●5学科を基盤とする1専攻5コースであり、適切である。</li> <li>●1専攻の設置が他校と比較して妥当なのかが不明であり、当否の判断がしかねる。</li> <li>●入学定員は多くないが、本科に対応して専門コースが設けられ、専門知識を修得する授業科目が展開されている。</li> <li>●進学が良い事なのか、今だに良く解りません。早く社会貢献出来ます事、願っていたのですが・・・</li> </ul>   |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等   |
|--|--------------|--|
| 2-1-③:<br>全学的なセンター等を設置している場合には、それらが教育の目的を達成する上で適切なものとなっているか。                                     | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●全学的な4センターが設置されていて適切である。</li> <li>●4つのセンターは適切に運営されている。相互の連携、調整が必要。</li> <li>●いずれのセンターもその役割を明確にした上で適切に運営され、広く学生に有効活用されていることが理解できる。</li> <li>●4センターは適切に運営されている。特に、地域連携共同開発センターは、地元とのネットワークや地域人材を活用するなど評価できる。</li> <li>●4つのセンターは、役割や機能が明確であり、教育活動の充実に寄与していることが窺われる。</li> <li>●各センターの活躍は素晴らしく、地域連携も含めて本校をアピール致して折りますが、教員の負担が多い様にも見えます。</li> </ul>   |
| 2-2-①:<br>教育課程全体を企画調整するための検討・運営体制及び教育課程を有効に展開するための検討・運営体制が整備され、教育活動等に係る重要事項を審議するなどの必要な活動を行っているか。 | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教務委員会、運営会議等が設置され、議事録から判断するに足りる活動を行っている。</li> <li>●教務委員会と専攻科委員会において適切に運営審議されている。</li> <li>●教務委員会をはじめ、各委員会が機能的に整備されている。なお、自己点検報告書から、その具体的な活動内容が十分に伝わってこない。</li> <li>●教務委員会、専攻科委員会で、教育課程全体の企画調整がなされ、有効に機能している。両組織の更なる有機的な連携を期待する。</li> <li>●活動は十分行われていると推察するが、教育課程(カリキュラム)全体についてPDCAサイクルを回す仕組み(資料11-2-③-1が相当する?)について明確に述べてはいかがか。特に各種委員会や会議が、具体的に教育課程のどの部分について、何を検討、計画、実施するのかなどを明らかにしてほしい。</li> <li>●教育現場の改善等大変努力致して折ります。本校は学校長を始め、教職員は常に学生目線ですが、一部には柔軟性にやや欠けるところもあり、今後の対応に期待したい。</li> </ul> |
| 2-2-②:<br>一般科目及び専門科目を担当する教員間の連携が、機能的に行われているか。  | 3.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●一般教育と専門教育の協議が行われているようですが、具体的に議論された中身が見えなかった。</li> <li>●一般科目担当教員と専門科目担当教員の連携は機能的におこなわれている。常設運営会議の設置が求められる。</li> <li>●教務委員会を中心に必要に応じて行われているのは理解できるが、今後、定期的に行う必要があるかどうか検討されたい。</li> <li>●常設組織を作るのも一案だが、有機的・機能的な連携を継続していただきたい。</li> <li>●教務委員会がどの程度開催されているか不明であり、機能的な役割を果たしているのかも不明である。</li> <li>●教員間の連携や協働のための組織や仕組みの充実が望ましい。</li> <li>●教員間連携は良く出来ています。各学科縦ライン横ライン尊敬されまして、バランス良く配分なされて折ります。</li> </ul>  |
| 2-2-③<br>教育活動を円滑に実施するための支援体制が機能しているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学級担任、学生支援室、非常勤カウンセラーがおかれ、課外活動にも顧問教員を配置し、外部顧問を招聘しているなど非常に手厚く支援されている。</li> <li>●課外活動、部活動の促進が必要。専門カウンセラーによる学生へのメンタルカウンセリングの実施。</li> <li>●広い視点から、多様な支援活動が行われていることが理解できる。</li> <li>●事務局も含めた幅広い支援が行われているので、今後も継続されたい。今後は、外部・地域からの支援も検討してはどうか。</li> <li>●本校は留年等一般高校にはあまり無い学校です。カウンセラー・学生支援室等、機能的に行われて居ます。</li> </ul>  |
| 3-1-①:<br>教育の目的を達成するために必要な一般科目担当教員が適切に配置されているか。  | 3.9          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●専任教員22名、非常勤講師29名の一般教育担当教員が配置されている。</li> <li>●これからの技術者には社会倫理が求められる。教養教育の充実を。</li> <li>●教育目標を達成するための教員配置に努めている。なお、自己点検評価にもあるように、国際社会で活躍できる人材の育成を目指し、英語力の向上に努めることを目標に掲げているので、その実現を図られたい。</li> <li>●適切である。コミュニケーション能力、国際感覚の観点から、語学力(英語)の向上は必須要件であり、対応に期待する。</li> <li>●一般科目教員の非常勤講師の人数割合が多いように思える。</li> <li>●適切な人員が配置されている。</li> <li>●英国言語の能力アップが必須の様に言われています。社内言語が英語の企業有りです。トピック800点の韓国に負けられません。教員のスキルが求められます。</li> </ul>  |
| 3-1-②:<br>教育の目的を達成するために必要な各学科の専門科目担当教員が適切に配置されているか。  | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●博士号取得者53名、技術士取得者4名、1級建築士取得者6名、1種情報処理技術者有資格者3名が配置されている。</li> <li>●適切に配置されている。</li> <li>●専門科目を担当する教員が適切に配置されており、質的な保証がされていることも理解できる。</li> <li>●博士号取得者や実務関連有資格者が配置されており適切である。</li> <li>●各学科で教育方針に即した人員を配置している。</li> <li>●適切に配置されています。</li> </ul>  |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|--|--------------|---|
| 3-1-③:<br>専攻科を設置している場合には、教育の目的を達成するために必要な専攻科授業科目担当教員が適切に配置されているか。                            | 4.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●博士号・技術士取得者、国際学会での発表経験のある教員が配置されている。</li> <li>●日々の授業では、教員の専門性が問われるわけであるが、適材が適所に配置され、きめの細かい配慮がなされている。</li> <li>●実務経験者、博士号取得者、有資格者が配置されており適切である。更に、プレゼンテーション能力の向上など、社会ニーズ・情勢を捉えた対応・運営をしていただきたい。</li> <li>●専攻科となる以上、それに対応出来るスタッフが揃えられなければならないし、当然揃っているものと思われる。</li> <li>●学位、実務経験、資格を有し、高度な専門知識の教育と研究に携わるのに適した人員を配置している。</li> <li>●各学科適切に配置されており、非常勤の教員が実践的で生の現場を解っている方ばかりですから生の声を聞いて素晴らしいです。</li> </ul>   |
| 3-1-④:<br>学校の目的に応じて、教員組織の活動をより活発化するための適切な措置が講じられているか。  | 3.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●幅広く教員を公募している。採用条件も研究のみに特化しているようには見えない。</li> <li>●教員の平均年齢48.4歳と高齢化が懸念される。公募による教員選考規則の運用にて考慮。</li> <li>●教員の採用方針が明確であり、優秀教員への評価制度などに工夫が見られるが、資質の向上方策に工夫が求められる。</li> <li>●優秀教員評価制度を導入しているほか、若手教員の登用も見られる。今後は、若手教員の計画的な採用に期待したい。</li> <li>●組織を活性化するために年齢構成にも配慮しながら採用を行ってきたことは評価できる。ただし、やみくもに均等な年齢構成がよいとばかりも言えず(ベテラン教員の層を厚くし、若手教員を指導することも有効)、今後とも学内で議論をして採用活動を行っていただきたい。</li> <li>●表彰制度は教員の意欲増進の一つの方策であるが、そればかりでは心もとない。他の方策も併用しながら組織の活性化を図っていただきたい。</li> <li>●1-2-①でも記入致しましたが、教員の高専卒業者教員多く血が濃いです。他高専との交流会勉強会「有りき」と思われます。</li> </ul> |
| 3-2-①:<br>教員の採用や昇格等に関する規定などが明確かつ適切に定められ、適切に運用がなされているか。                                       | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●新規採用や昇格に関する規定は整備されているが、昇格に関する運用が読み取れなかった。</li> <li>●新規採用は公募により行われ適切。優秀教員評価制度は評価できる。</li> <li>●細部にわたり明確化されており、運用は適切である。</li> <li>●関連各規程等が明確かつ適切に定められており、適切に運用されている。対象4か年の採用教員は、修士3名、博士24名、計27名であり、評価できる。継続していただきたい。</li> <li>●教員の人事に関する規程が定められ、適切に運用されている。</li> <li>●高専機構が御決めて折るのでしょうから、外部評価委員で有っても聖域をくつがえす事では有りません。常識の範囲は方々によって違います。</li> </ul>   |
| 3-2-②:<br>教員の教育活動に関する定期的な評価を適切に実施するための体制が整備され、実際に評価が行われているか。また、その結果把握された事項に対して適切な取組がなされているか。 | 3.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生による授業評価報告書などにより適切に取り組まれている。また、教員の自己評価書は教員表彰者の根拠として採用。</li> <li>●点検評価委員会を設け体系的な評価活動が行われていること、学生による授業評価が行われていることなど評価できる。今後は、それに基づいて課題を明確にして、具体的な改善がなされるとなよい。</li> <li>●授業評価アンケートは教員にフィードバックされ、コメントの提出が求められ、「学生による授業評価報告書」として開示されている。教員の自己点検報告書の提出も含め教員表彰がなされている。</li> <li>●学生による授業評価報告書の存在は分かるが、その結果までは明らかにされていないのは、情報として不十分。</li> <li>●教員の自己評価書の提出率の向上が望まれる。</li> <li>●自己評価・提出、アンケート等適切な取り組み成されて折る様です。</li> </ul>  |
| 3-3-①:<br>学校において編成された教育課程を展開するために必要な事務職員、技術職員等の教育支援者が適切に配置されているか。                            | 3.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育課程を展開するために、必要な事務職員、技術職員が適切に配置されている。</li> <li>●事務職員・技術職員は適切に配置されている。</li> <li>●諸規程によって、組織や事務内容は明らかになっている。今後は、具体的な取組がどのように行われているのか示されたい。</li> <li>●教育支援者は適切に配置されている。今後も、昇格や異動なども、モチベーションの維持・向上に努めていただきたい。</li> <li>●規程及び組織図から配置すべき体系は分かるが、それらが全て個別に配置されているかについては不明。</li> <li>●適切に配置されていると推察するが、人数などが資料にない。高専においては技術職員の役割は重要であり、十分な人員が確保できているか懸念する。また資料3-3-①-1には、自己評価書の他の部分にでてくる、授業改善推進室などの記述がない。</li> <li>●事務職員、技術職員は適切に配置されているが、一部には柔軟性にやや欠けるところもあり、今後の対応に期待したい。</li> </ul>  |

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|---|--------------|---|
| 4-1-①:<br>教育の目的に沿って、求める学生像や入学者選抜の基本方針などが記載された入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)が明確に定められ、学校の教職員に周知されているか。また、将来の学生を含め社会に理解されやすい形で公表されているか。 | 4.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●入学者受入方針が定められ校内掲示等により周知されている。また募集要項や学校案内リーフレットにも掲載されている。</li> <li>●アドミッションポリシーは冊子、ホームページにも明示されている。また入試説明会、学校説明会、オープンキャンパスなどで更なる周知が図られている。</li> <li>●入学者受け入れ方針が明確に示され、関係各方面に多様な方法で周知されている。</li> <li>●明確に定められ明文化されており、冊子、ホームページによる公表や各種説明会などで広く周知されている。</li> <li>●学校案内などに明示されている。またその表現もわかりやすい形になっている。</li> <li>●オープンキャンパス、学校長におきましては学校訪問、出前授業等社会に対して明確に周知致しております。</li> </ul>  |
| 4-2-①:<br>入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)に沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実際の入学者選抜が適切に実施されているか。   | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切な学生の受入方法が採用され、実施されている。</li> <li>●適切に実施されている。</li> <li>●資料からは、入学者受け入れ方針に沿って適切な受け入れが行われているように読み取れるが、面接試験内容などさらに工夫されるとよい。</li> <li>●入学者受け入れ方針に従って実施されている。</li> <li>●学力の判定に傾斜配点を行うなど、アドミッションポリシーに沿った入試が行われている。特に推薦入試の口頭試問において、アドミッションポリシーを反映した質問事項を設けていることは評価できる。</li> <li>●公平・明確に入学者を受け入れております。</li> </ul>   |
| 4章<br>4-2-②:<br>入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)に沿った学生の受け入れが行われているかどうかを検証するための取り組みが行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立っているか。                     | 3.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●入学者対策室が設置され受入れた学生の検討がなされている。傾斜配点を行った場合と行わない場合については、入学後の学生の学業などに対する進捗度比較が困難である。</li> <li>●推薦選抜者と学力選抜者との学力差の検証は、推薦選抜と学力選抜との比率は適切か。</li> <li>●検証のためのアンケートを活用していることが理解できる。今後、具体的に改善された点などを記載していただきたい。</li> <li>●毎年度反省会が行われ、改善策が議論されているなど、改善する取り組みが行われている。</li> <li>●アドミッションポリシーが受験生に周知されていることと、ポリシーに沿った入試が行われていることは別であると思うので、成績の追跡調査や入学後の行動などを検証する方策を検討していただきたい。これは難しい問題であると考えられるが、例えば入試で重視した科目と入学後の関連科目の成績の相関などから、必要な資質を備えた学生を受け入れているかを見ることはできるかもしれない。</li> <li>●キチンと検証されており、改善点有ればしるべき行動が取り行われて折ります。</li> </ul> |
| 4-3-①:<br>実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われるなど、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。                   | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●実入学者数が定員に対して大幅にずれはない。</li> <li>●適切と考える。</li> <li>●自己点検評価の趣旨については理解できるが、何をもって専攻科課程の定員と実入学者の関係を概ね適正とするか読み取れない。</li> <li>●概ね適正である。</li> <li>●専攻において入学者はほぼ定員に近いものの、合格者数は5割増としていることやむを得ない理由があるのか。</li> <li>●適切に行われている。</li> <li>●適切です。少子化動向で問題はありますが、今後の社会状況も考えより高い認識が必要です。</li> </ul>   |
| 5章<br>5-1-①:<br>教育の目的に照らして、授業科目が学年ごとに適切に配置され、教育課程が体系的に編成されているか。また、授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿って、教育の目的を達成するために適切なものになっているか。     | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育課程が体系的に編成されている。</li> <li>●学生のニーズ、学術の発展動向、社会の要請に対応した教育課程の編成に配慮している。</li> <li>●きめ細かく、また、体系的に教育課程が編成され適切と考える。</li> <li>●段階的、体系的に配置されており、適切である。また、デザイン教育を新設したことは評価できる。今後も、社会ニーズ・情勢を捉えた対応・運営をしていただきたい。</li> <li>●科目間の関連性、履修順序、教育目標との関連性が、学生便覧にわかりやすく可視化されていることは評価できる。</li> <li>●学年単位の到着度が明確で適切に行われています。本校は進級が難しいです。</li> </ul>   |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|--|--------------|---|
| 5-1-②:<br>学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に対応した教育課程の編成に配慮しているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生のニーズ、社会からの要請等に対応した教育課程の編成が配慮されている。</li> <li>●インターンシップの参加者少ない。現在、キャリア推進室が設置されているが各教科員との齟齬が生じている。強い連携がもたらされる。</li> <li>●学年の進行とともにメリハリをつけた編成がなされており、インターンシップなどにも重点が置かれているので評価できる。</li> <li>●他大学との単位互換、インターンシップ、資格取得支援など等の規定化がなされ運用されている。特にインターンシップは学科間でのバラツキはあるものの、増加しており50%に達したことは評価できる。今後は、全学的な指導と認定資格の社会ニーズへの対応を期待する。</li> <li>●インターンシップの有益性を捉えているならば、参加による優遇措置も考えてはいかかがか。</li> <li>●活発に行われているが、たとえばインターンシップなどの学外との連携による学生の教育活動は、継続してさらに充実するよう努力してほしい。</li> <li>●英国語、語学カアップは近々の問題です。インターンシップへの指導強化が必須。</li> </ul> |
| 5-2-①:<br>教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。                  | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●授業形態のバランスが適切である。</li> <li>●適切に構築されている。</li> <li>●バランスのとれた授業が行われており、教材の工夫などもよくなされていることが読み取れる。</li> <li>●授業形態のバランスはとれている。また、e-ラーニングや留学生への日本語講座開設など工夫がなされている。FDアクションレポートを継続且つ、有効に活用されたい。</li> <li>●各学科共に理論と演習、実験、実習が適切に配置されている。指導法についても工夫を感じられるが、5-2-②とも関連して、プロジェクトワークのような科目は、全学科に導入する価値があるように思う。</li> <li>●「教材・機材・システム」適切である。最新技術と学習指導が行われている。</li> </ul>   |
| 5-2-②:<br>教育課程の編成の趣旨に沿って、適切なシラバスが作成され、活用されているか。  | 3.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切なシラバスが作成されている。</li> <li>●シラバスの利用向上の対策が望まれる。</li> <li>●シラバスが作成され、活用に努めていることが理解できる。今後、さらなる活用が図られるよう工夫が必要である。</li> <li>●全教員がシラバスの作成と活用を行っている。学生の利用は少しずつ向上しているが、23年度5段階で2.91であり、更なる活用のための対策が必要。</li> <li>●シラバスに表記する内容が明確に規定され、教員に周知されたうえでシラバスが作成されており、学生が必要な情報を得ることができる。学生がシラバスをどのように活用すべきかは難しい問題であるが、授業中に達成目標に対する注意を喚起したり、授業計画の進捗状況を示すなど、教員側から学生にシラバスの参照を促す工夫なども必要かもしれない。</li> <li>●適切に作成されているが、活用は「横這い」の様子。</li> </ul>  |
| 5-2-③:<br>創造性を育む教育方法(PBLなど)の工夫やインターンシップの活用が行われているか。  | 3.9          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育方法の工夫やインターンシップの活用がなされている。</li> <li>●インターンシップ参加者アップにより一層の活用が期待される。</li> <li>●今後もインターンシップには重点をおいた教育実践を継続してほしい。また、報告会で情報を共有できるように工夫されているのも心強い。</li> <li>●教育目標達成度アンケートで5段階評価で3.4以上、インターンシップは学科間でのバラツキはあるものの全体で50%に達し、終了後報告会を開催しているなど評価できる。更なるパイラルアップすることを期待する。</li> <li>●インターンシップ報告会での内容の提示を望みたい。学生の評価が不明である。</li> <li>●活発な活動が行われているが、PBLに限らず、グループワーク、ディベート、フィールドワーク、振り返り、など、学生の能動的、主体的な学修を促進する、アクティブラーニングの手法をさらに広めてゆくことを検討していただきたい。</li> <li>●卒研発表会、インターンシップ報告会等活用されている。</li> </ul>                                  |
| 5-3-①:<br>成績評価・単位認定規定や進級・卒業認定規定が組織として策定され、学生に周知されているか。また、これらの規定に従って、成績評価、単位認定、進級認定、卒業認定が適切に実施されているか。 | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●成績評価・単位認定規定や進級・卒業認定規定が策定され、学生便覧に記載され学生に周知されている。また、これらの規定に従って、成績に関する学生からの異議申し立て制度があり、成績評価、単位認定、進級認定、卒業認定が適切に実施されている。</li> <li>●学業成績の評価が並びに学年課程修了及び卒業の規定により明確に周知されている。学生の異議申し立てについての実態を知りたい。</li> <li>●評価システムについては、基準が明確であり学生への周知方法、判定方法も適切である。今後、問題の難易度によって科目間の成績にばらつきが生じないようにする工夫も必要である。</li> <li>●関連各規定等が明確かつ適切に定められており、学生便覧への記載、わかりやすくした「キャンパスライフ」への掲載により、学生に周知されるなど、厳正に運用されている。</li> <li>●便覧などにより規定が学生に周知されている。加えてガイダンスなどでの説明は行われているであろうか。</li> <li>●適切に周知されている。学生は理解しているが、保護者の認識が悪いのでは・・・(後援会の責任で有る)</li> </ul> |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|--|--------------|---|
| 5-4-①:<br>教育課程の編成において、特別活動の実施など人間の素養の涵養がなされるよう配慮されているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●特別活動(HR)の実施、前期・後期の球技大会や工場見学、専門学科教員によるフロンティア技術入門などが配置され、人間としての素養の涵養がなされるよう配慮されている。</li> <li>●学校には運営HRは大切。科だけでなく全体の情報共有が必要。</li> <li>●特別活動の時間が設定されている学年においては、多角的に、また、積極的に活動させている様子がうかがえる。</li> <li>●1年次に技術者の倫理観などを涵養する「フロンティア技術入門」を開設するなど配慮されている。</li> <li>●「フロンティア技術入門」において、技術者倫理などについても教育されていることは評価できる。</li> <li>●留学生制度による諸外国者との交流、ホンコンとの学生交流等配慮されている。</li> </ul>   |
| 5-4-②:<br>教育の目的に照らして、生活指導面や課外活動等において、人間の素養の涵養が図られるよう配慮されているか。  | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生委員会、学生支援室等による生活指導、学生会に課外活動クラブが組織され、人間の素養の涵養が図られるよう配慮されている。</li> <li>●教育理念達成の為の努力、配慮がなされている。</li> <li>●一般科目や専門科目の修得に偏ることなく、学生の間としての資質を涵養するために担任を中心としたきめ細かな体制が整えられ、それらに関わる学生の自己評価も行われているのは評価できる。</li> <li>●学生支援室の組織化、カウンセラーの配置や、「豊かな人間性」「豊かな感性」に関するアンケートを実施するなど配慮がなされている。</li> <li>●カウンセラーの配置が行われており、十分配慮されている。</li> <li>●学生会、学生支援室、心理カウンセラー等の配慮、充実している。</li> </ul>   |
| 5-5-①:<br>準学士課程の教育との連携を考慮した教育課程となっているか。  | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●準学士課程の教育との連携を考慮した複合工学科の1専攻・5コース制が設置されている。</li> <li>●技術者教育プログラムにより連携を考慮している。</li> <li>●組織上、カリキュラム上でよく連携、一貫した体制が組まれていることが理解できる。</li> <li>●22年4月から1専攻5コースとなり一層の連携が図られている。</li> <li>●適切であると考えられる。</li> <li>●技術者教育プログラムにより考慮されている。</li> </ul>  |
| 5-5-②:<br>教育の目的に照らして、授業科目が適切に配置され、教育課程が体系的に編成されているか。また、授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿って、教育の目的を達成するために適切なものになっているか。 | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育の目的に照らして、授業科目が適切に配置され、教育課程が体系的に編成されていると読み取れる。各コース内に必修科目として特別研究、実務研修が置かれ、コース共通の必修科目が置かれるなど、授業の内容が全体として教育課程の編成の趣旨に沿って、教育の目的を達成するために適切なものになっている。</li> <li>●適切に配置され、体系的に編成されている。</li> <li>●専攻科の教育目標が達成できるように意図した教育課程が編成され、その体系も明らかになっている。</li> <li>●コースごとに体系的に構築されているほか、必修科目や異分野を学べるなど、複眼的・フレキシビリティのある開発型技術者育成に配慮している。</li> <li>●科目間の関連性、履修順序、教育目標との関連性が、学生便覧にわかりやすく可視化されていることは評価できる。</li> <li>●適切に配置されている。</li> </ul>  |
| 5-5-③:<br>学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に対応した教育課程の編成に配慮しているか。  | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●他コースで開設されている専門科目の履修上限を撤廃し、担当教員の許可を得ることができれば、履修可能となっており、実務実習(インターンシップ)も開設され、学生の多様なニーズ、学術の発展動向、社会からの要請等に対応した教育課程の編成になっている。</li> <li>●大学コンソーシアム加入やインターンシップによる実務研修がなされている。</li> <li>●様々なニーズに応えるべき努力はされているが、本校としての視野を広めてさらなる配慮を求めたい。</li> <li>●9大学との単位互換協定の締結やインターンシップによる単位認定に加え、「実務研修」を必修科目として開設するなど配慮されている。</li> <li>●活発に行われているが、学外との連携による学生の教育活動は、継続してさらに充実するよう努力してほしい。</li> <li>●多様なニーズに沿って指導されています。大学の単位互換協定等配慮されている。</li> </ul>  |
| 5-6-①:<br>教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。                          | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●各コース共に講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫が読み取れる。</li> <li>●講義、演習、実験、実習等の授業形態のバランスが適切である。</li> <li>●教育目標達成のための教育課程上の工夫がなされている。今後、授業者レベルにおいてその意図が浸透し、ねらいに沿った授業が実施されているかどうか検証する必要がある。</li> <li>●特別研究を重要視したバランスのとれた授業形態である。協同実験を通じたエンジニアリングデザイン方式や地元への提案など工夫がなされている。今後も、社会ニーズ・情勢や地域との共生も意識した工夫をしていただきたい。</li> <li>●物質工学、建築以外での実験実習において指導法に工夫があるのか不明瞭である。</li> <li>●特別研究の比重が重くなっているが、デザイン教育科目やフィールドワークを伴う科目を重視し、単位数を多くすることで、本校の特色とすることもできるかもしれない。</li> <li>●特別研究が重要視されており、授業形態が組まれており、適切なバランスで有る。</li> </ul> |

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|---|--------------|---|
| 5-6-②:<br>創造性を育む教育方法(PBLなど)の工夫やインターシッパの活用が行われているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●プロジェクトデザインや地域設計Iなどが開講され、創造性を育む教育方法的工夫がなされ、インターシッパは専門必修科目となっている。</li> <li>●インターシッパなどが積極的に実施されていることは評価できる。各科とも参加率アップが望まれる。</li> <li>●実施した結果がアンケートで示されているが、到達目標(基準)を設定し、到達度で成果の判定を行うことも必要である。</li> <li>●コース共通の「プロジェクトデザイン」は、就職先企業へのアンケートや「学習習熟度」アンケートから、創造性の醸成に効果的である。</li> <li>●活発な活動が行われているが、PBLに限らず、グループワーク、ディベート、フィールドワーク、振り返り、など、学生の能動的、主体的な学修を促進する、アクティブラーニングの手法をさらに広めてゆくことを検討していただきたい。</li> <li>●積極的にインターシッパを実施されている。</li> </ul>  |
| 5-6-③:<br>教育課程の編成の趣旨に沿って、シラバスが作成され、事前に行う準備学習、教育方法や内容、達成目標と評価方法の明示など内容が適切に整備され、活用されているか。                     | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育課程の編成の趣旨に沿って、シラバスが作成され、事前に行う準備学習、教育方法や内容、達成目標と評価方法の明示など内容が適切に整備され、活用されている。</li> <li>●シラバスは詳細に準備、公開されている。</li> <li>●評価結果において、アンケートの「結果3.6なので十分……」とあるが、あらかじめ、評価基準を設定しておく必要があると考える。</li> <li>●全教員がシラバスの作成と活用を行っている。専攻科学生の利用は、23年度5段階で3.6以上で活用されている。</li> <li>●シラバスに表記する内容が明確に規定され、教員に周知されたうえでシラバスが作成されており、学生が必要な情報を得ることができる。学生がシラバスをどのように活用すべきかは難しい問題であるが、授業中に達成目標に対する注意を喚起したり、授業計画の進捗状況を示すなど、教員側から学生にシラバスの参照を促す工夫なども必要かもしれない。</li> <li>●シラバスは適切に行われ、詳細に準備・公開されております。</li> </ul> |
| 5-7-①:<br>専攻科で修学するにふさわしい研究指導が行われているか。   | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●専攻科で修学するにふさわしい研究指導が工夫されている。</li> <li>●専攻科生の学会などでの研究発表件数の多いのは成果の表れである。</li> <li>●学生の希望や、意欲に基づいた適切な研究指導が行われていると理解する。</li> <li>●研究テーマは学生と指導教員が事前に相談し学生の希望を尊重した研究意欲に配慮したもになっている。地域企業との共同テーマや、外部の発表会での入賞など評価できる。</li> <li>●学会発表件数はあるものの、論文での発表はわずかである。その辺りに課題はないのか。</li> <li>●研究テーマの設定、複数教員による指導体制など、体制が整っており、内容も適切であると考ええる。</li> <li>●研究学会発表等、キチンと指導されています。評価も適切で有る。</li> </ul>   |
| 5-8-①:<br>成績評価・単位認定規定や修了認定規定が組織として策定され、学生に周知されているか。また、これらの規定に従って、成績評価、単位認定、修了認定が適切に実施されているか。                | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●成績評価・単位認定規定や修了認定規定が組織として策定され、学生に周知されている。また、これらの規定に従って、成績評価、単位認定、修了認定が適切に実施されている。</li> <li>●規定も明確になされ学生への周知もよくなされている。</li> <li>●諸規程が適切に整備され、それらに基づいて、組織的・機能的な認定が行われていると理解できる。</li> <li>●関連各規定等が明確かつ適切に定められており、学生便覧への記載、わかりやすくした「専攻科履修の手引き」への掲載により、学生に周知されるなど、適正に運用されている。</li> <li>●便覧などにより規定が学生に周知されている。加えてガイダンスなどでの説明は行われているであろうか。</li> <li>●授業科目の履修に関する規程、判定会議により適切に実施されている。</li> </ul>  |
| 6-1-①:<br>高等専門学校として、その目的に沿った形で、課程に応じて、学生が卒業(修了)時に身に付ける学力や資質・能力、養成する人材像等について、その達成状況を把握・評価するための適切な取組が行われているか。 | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生が卒業(修了)時に身に付ける学力や資質・能力、養成する人材像等について、達成状況を把握・評価するための適切な取組が行われている。</li> <li>●シラバスには各科目の達成目標と評価方法が明示されている。</li> <li>●シラバスに各科目の達成度と評価方法が明記されている。卒業・終了時に判定基準のもとに達成度が審議・評価されている。</li> <li>●授業科目ごとに、達成目標、教育方針との対応、評価方法が明確に定められてシラバスに開示され、学生に周知されている。</li> <li>●進級・卒業・修了は、単位修得状況、出席状況などにより判定されている。</li> <li>●加えて、本校の教育目標に対する総合的な達成状況を可視化するような仕組みが考えられるとより一層の教育効果が望められると思われ。</li> <li>●本科生・専攻科生共に「達成すべき教育目標」に明記されております。一定の基準によりまして、審議・評価され質の保証を行っている。</li> </ul>                       |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|--|--------------|---|
| 6章<br>6-1-②:<br>各学年や卒業(修了)時などにおいて学生が身に付ける学力や資質・能力について、単位修得状況、進級の状況、卒業(修了)時の状況、資格取得の状況等から、あるいは卒業研究、卒業制作などの内容・水準から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。           | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育の成果や効果が上がっている。</li> <li>●過去5年間の進級率向上は効果の表れと評価できる。</li> <li>●学生が資格の取得等に向けて、目標をもって学習に取り組んでいることは評価できる。今後、留年する学生数の減少等に向けた具体策が必要と考える。</li> <li>●学年、学科・コースにより多少のバラツキはあるが、教育の成果は上がっているものと思料。</li> <li>●進級率は100%ではないものの、堅実な数値を維持しており、また卒業研究の評価も一定の水準以上であり、教育効果が上がっていることが確認できる。</li> <li>●留年の防止の為に対策の強化の実施、卒業研究制作等効果が上がっている。</li> </ul>  |
| 6章<br>6-1-③:<br>教育の目的において意図している養成しようとする人材像等について、就職や進学といった卒業(修了)後の進路の状況等の実績や成果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。  | 4.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育の目的において意図している養成しようとする人材像等について、就職等進路の状況等の実績や成果から判断して、教育の成果や効果が上がっている。</li> <li>●就職、進学実績も良好にて教育効果は高いものがある。</li> <li>●諸々の数値から教育の成果や効果が上がっていることが理解できる。今後、進路先が、学生の希望にどの程度叶っているのか知りたい。</li> <li>●対象4力年の求人倍率は約20倍で、(就職者数+進学者数)/(卒業生数)=0.97と、ほぼ100%と卒業生に対する評価は高い。</li> <li>●就職・進学率は堅実な数値を維持しており、また求人も多いことから、本校の教育効果は、内部的な評価としても、産業界による外部評価としても、十分であることが窺われる。</li> <li>●大変良いです。速攻力の有る学生は、就職率の高さが十分に評価と比例しています。</li> </ul>  |
| 6章<br>6-1-④:<br>学生が行う学習達成度評価等、学生からの意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっているか。   | 3.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生自身の学習達成度評価等、意見聴取の結果から判断して、教育の成果や効果が上がっている。しかし語の学力・国際感覚が身につけていないと学生自身は判断している。</li> <li>●国際感覚、社会のニーズの理解力、英語の学力向上に改善を要する。</li> <li>●これからの社会における国際競争力の課題から考えると語学力の問題は避けられないが、義務教育からの根本的な課題もあるので一概には言えない。しかし、努力を重ね、自信を持たせる必要もあるので本学としてもさらなる努力をしてほしい。</li> <li>●11項目中9項目において5段階評価中概ね3以上であるが、「英語力」「国際感覚」は低いので、改善を期待する。</li> <li>●グローバル社会を見据えた人材育成への対応が不足していると思われる。</li> <li>●一般に学生に自己評価をさせると、自分の能力に対して過小に評価する場合もあるので、数値そのものは問題にたくない。全体として英語および国際感覚以外の項目がまんべんなく身につけていると自覚していることは、よい結果であると言える。語学力や国際感覚については、改善の方策を模索する必要はあるが、現在既に取り組まれているようなので、今後、その効果が現れてくることを待ちたい。</li> <li>●英語力の低さが課題の様です。カリキュラムの変更・改善が必要。</li> </ul> |
| 6章<br>6-1-⑤:<br>卒業(修了)生や進路先などの関係者から、卒業(修了)生が在学時に身に付けた学力や資質・能力等に関する意見をアンケート調査を実施している。その結果から判断して、評価点は5段階で3以上で、教育の成果や効果が上がっている。その中で国際感覚と英語力が比較的に低い。 | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●自己学習達成度評価での改善事項が是正されている。すばらしい。</li> <li>●インターンシップを受け入れた企業からの評価等に鑑み、教育の成果が上がっていることが理解できる。</li> <li>●就職先企業やインターンシップ先企業へのアンケートを実施している。資質・能力については9項目中7項目で5段階評価中3以上で、「専門知識」、「コミュニケーション能力」の評価が高く教育の成果や効果は上がっていると思料。</li> <li>●インターンシップ受入れ企業からのアンケートからも上記のことが指摘出来る。</li> <li>●企業、大学からの評価は、概ね良好であり、教育効果が上がっていると見える。</li> <li>●企業・大学・進学先からのアンケート結果により教育成果が上がっている。</li> </ul>   |
| 7章<br>7-1-①:<br>学習を進める上でのガイダンスが整備され、適切に実施されているか。また、学生の自主的学習を進める上での相談・助言を行う体制が整備され、機能しているか。   | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●ガイダンスが整備され、適切に実施されている。また、学生の自主的学習を進めるために、各教員によるオフィスアワーが実施されている。</li> <li>●各種ガイダンスが適時実施されている。</li> <li>●新入生等のガイダンスは意図的計画的に実施されている。オフィスアワーについては、体制は整えられているものの、相談者数については多いのか少ないのか判断できない。</li> <li>●新入生ガイダンスに加え卒業研究、各授業科目、コース分けガイダンスを必要に応じ行われているほか、学生からの質問や相談に応じるために教員が必ず教員室にいるオフィスアワーも実施しており、整備されている。</li> <li>●ガイダンスは十分行われている。</li> <li>●オフィスアワーによる学生対応は結構であるが、教員は必要な時にはいつでも相談にのってくれる、と学生が思うだけの信頼関係がより重要と考えるので、オフィスアワーに限らず、学生が教員に相談できる雰囲気づくりをしてほしい(実質的にそうなっているようにも思う)。</li> <li>●ガイダンスがキチンと整備されて折り、素晴らしいです。</li> </ul>  |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|--|--------------|---|
| 7-1-②:<br>自主的学習環境及び厚生施設、コミュニケーションスペース等のキャンパス生活環境等が整備され、効果的に利用されているか。         | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●自主的学習環境及び厚生施設、コミュニケーションスペース等が整備され、効果的に利用されている。</li> <li>●来年にはものづくり教育センター等の設備の充実がなされる。ロボコンに偏らない年間平均した利用が望まれる。</li> <li>●図書情報センターや厚生施設等が整備され、よく活用されていることが理解できる。</li> <li>●図書情報センターなどの施設が設置され、時間外利用も可能である。コミュニケーションスペースも確保されている。</li> <li>●図書館、情報科学教育研究センター、ものづくり教育研究センターにより、学生の自主学習のための施設が確保されている。時間外の利用にも配慮されていることは評価できる。</li> <li>●学生達の自主的学習環境も充実している。使い勝手は各センターからの情報も有りまして、良好。</li> </ul>                                      |
| 7-1-③:<br>学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●ホームルーム、寮務主事等による学生との懇談会等、学習支援に関する学生のニーズが適切に把握されている。</li> <li>●HRを通して把握されている。センターやキャリア推進室で行う講演会にも積極的な協力が望まれる。</li> <li>●保護者との懇談会の機会を設けるなど様々な工夫がなされている。</li> <li>●ホームルームに加え、学生との懇談、学生アンケート、保護者との懇談などにより、ニーズを把握している。</li> <li>●授業評価アンケートやホームルームなど以外にも、学生からの学校生活全般に関する要望意見を聴取する仕組み(「意見・要望箱」を構内に設置するなど)があってもよい。</li> <li>●プリントが配布される訳では有りませんが、HRを通じ担任の先生よりの報告で把握されている。</li> </ul>   |
| 7-1-④:<br>資格試験や検定試験受講、外国留学のための支援体制が整備され、機能しているか。                             | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●資格試験や検定試験受講、外国留学のための単位認定規定が整備され、機能している。</li> <li>●資格試験等の受験指導も行われ支援体制は機能している。</li> <li>●資格取得に係わる諸規程が整備され、補習や海外研修制度も充実してきている。</li> <li>●資格試験、外国留学に係る単位認定の規定が整備されており、受験案内・受験指導及び海外留学制度も設置されている。</li> <li>●支援体制があり、学生に対する案内や説明会などにより、周知されている。</li> <li>●十分に整備されまして、機能されています。</li> </ul>   |
| 7章<br>7-1-⑤:<br>特別な支援を行うことが必要と考えられる者への学習支援体制が整備されているか。また、必要に応じて学習支援が行われているか。 | 3.9          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●外国人留学生への支援体制が整備され、支援が行われている。今後は学校生活になじみにくい日本人への配慮も検討すべきである。</li> <li>●海外留学規定、外国人留学生規定が整備され適切な指導が行われている。</li> <li>●留学生等への特別な支援体制は整えられている。今後、身体に障がいのある学生等に対する学習(運動・体育等)支援の在り方についても検討しておく必要を感じる。</li> <li>●留学生については担任及びチューターが学習面、生活面の指導、助言を行っている。編入学生については、入学前後に学習面で必要な指導を行っている。</li> <li>●留学生の人数が多いのか少ないのかの判断が付かないが、魅力的対応がされているとまでは認められない。</li> <li>●留学生、編入生に対する補講などの支援が行われている。</li> <li>●留学生・編入生に対しても適切な指導が行われている。</li> </ul>    |
| 7-1-⑥:<br>学生のクラブ活動や学生会等の課外活動に対する支援体制が整備され、機能しているか。                           | 3.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生主事等と学生会との意見交換会や全クラブ配置されている教員による指導により、課外活動に対する支援体制が機能している。同一学生が勉学にも、課外活動にも頑張っているとは読み取れない。文武両道は難しいのか?</li> <li>●学生会各部指導教員が適切に配置されている。</li> <li>●本校ハンドベル部等の活躍は目を見張るものがある。今後、指導者の資質の向上に向けた取組も必要と考える。(本校では考えにくいですが、体罰、喫煙問題など)</li> <li>●学生会・クラブ活動への財政的支援も含め行われており、ロボコンなど、優秀な成績を収めている。</li> <li>●高専らしい課外活動が行われている。今後は是非継続してほしい。</li> <li>●担当指導教員がキチンと配置されていますが、中にはその部活のルールすら解らない方も現実問題としています。金銭支援による交通費・旅費等は後援会も協力しています。</li> </ul> |
| 7-2-①:<br>学生の生活や経済面に係わる指導・相談・助言を行う体制が整備され、機能しているか。                           | 3.9          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生委員会、学生支援室、心理カウンセラー、保健室が設置され、教員に対しては厚生補導研究会が開催されている。</li> <li>●生徒のさまざまな悩みに対して、適切なカウンセリングを実施出来る体制が必要。</li> <li>●諸々の相談・支援体制がよく整備されており、学生もよく活用していることが理解できる。</li> <li>●体制は整備されており、厚生補導研究会などにより関係職員の指導に係る資質向上にも努めている。</li> <li>●学生支援室、カウンセラーなどにより対応がなされている。</li> <li>●細かい配慮がされています。クラス担任・学生支援室・カウンセラー等きちんと整備されて機能致します。</li> </ul>   |

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|---|--------------|---|
| 7-2-②:<br>特別な支援を行うことが必要と考えられる者への生活支援等を適切に行うことができる状況にあるか。また、必要に応じて生活支援等が行われているか。                                 | 3.9          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●留学生や障害を持つ学生への配慮はなされている。</li> <li>●留学生及び障害を持つ学生への支援体制が整備されている。</li> <li>●よく支援が行われていると理解する。なお、身体的に特別な支援を要する学生はいないようであるが、精神的に特別な支援を要する学生がいるかどうか把握することも必要であると考ええる。</li> <li>●留学生用の生活設備の設置や構内のバリアフリー化に努めている。</li> <li>●少数の個所でも障害を持つ学生にとってアクセスが困難な場所があるようでは、バリアフリーが実現できていないことになってしまうので、もし未対応な場所が構内にあるようであれば早急に対応をするべきである。</li> <li>●適切に行われています。過分なる対応を求める保護者の対応も考慮すべきか？</li> </ul>  |
| 7章<br>7-2-③:<br>学生寮が、学生の生活及び勉学の場として有効に機能しているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生寮が、学生の生活及び勉学の場として有効に機能している。</li> <li>●入寮者数が減少している理由は、遠距離通学生の入居状況は。</li> <li>●施設・設備が整備され、雰囲気もよいことが推測される。時には、学生の意識調査など(満足度)も必要ではないか。</li> <li>●生活に必要な設備は整備されているほか勉学スペースとしても利用できる談話室が設置されているほか、高学年生及び教員による学習指導も行われている。</li> <li>●ミーティングルーム、学習室などの施設も整備され、また学習会などの活動が行われており、有効に機能していると考えられる。</li> <li>●有効的である。</li> </ul>   |
| 7-2-④:<br>就職や進学などの進路指導を行う体制が整備され、機能しているか。   | 4.7          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●進路支援室及びその規程が整備され、機能している。</li> <li>●完全就職から体制は十分機能している。</li> <li>●年間、年度を見通して、意図的・計画的に進路に関する支援が行われていると認識している。</li> <li>●クラス担任による直接の進路指導のほか、全学組織として進路支援室が設置されており、就職ガイダンス・進路説明会の開催、情報提供を行っている。就職率・進学率ともほぼ100%であることから、十分機能していると思料。</li> <li>●担任と進路支援室により指導体制が整っている。求人も十分に多く、進路指導は十分機能していると言える。</li> <li>●就職率100%からしても体制は整備されている。</li> </ul>   |
| 8-1-①:<br>学校において編成された教育研究組織の運営及び教育課程の実現にふさわしい施設・設備が整備され、適切な安全管理の下に有効に活用されているか。また、施設・設備のバリアフリー化や環境面への配慮がなされているか。 | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切な施設・設備が整備され、適切な安全管理の下に有効に活用されている。また、施設のバリアフリー化が試みられている。</li> <li>●施設整備状況は良好で有効活用され、満足度も高い。</li> <li>●教育目標を達成するために必要な施設が明らかにされ、それに基づいて整備されている。また、主な施設・備品の活用状況も明らかにされており、安全管理面に関する配慮もなされている。さらに、満足度に関するアンケートも実施され、概ね支持されている。</li> <li>●教育課程実現のための施設・整備がなされている。23年度の「施設満足度アンケート」によれば学生から概ね良い評価を得ている。また、バリアフリー化の配慮もなされている。</li> <li>●十分な施設・設備を持ち、継続的に改善が行われている。また学生の自習を促すためのスペースが、図書館にて夜間や土曜日にも開放されていることは評価できる。</li> <li>●施設整備状況は良好で有る。企業では入手不可能な機材も充実しており、学生の満足度も高い。</li> </ul>  |
| 8章<br>8-1-②:<br>教育内容、方法や学生のニーズを満たすICT環境が十分なセキュリティ管理の下に適切に整備され、有効に活用されているか。                                      | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切なICT環境が十分なセキュリティ管理の下に整備され、有効に活用されている。</li> <li>●情報ネットワークは「小山工業高等専門学校情報セキュリティポリシー」に基づき管理活用されている。</li> <li>●適切な「セキュリティポリシー」に基づいて、本学の強みとも言えるICT環境が整備されている。また、有効に活用されていることも伝わってくる。なお、今後も、外部に対してそのノウハウの一部を提供してほしい。</li> <li>●Gigabit Ethernetによる高速ネットワークが構成され、「小山工業高等専門学校情報セキュリティポリシー」に基づき十分なセキュリティ管理下で運用されている。</li> <li>●環境は十分整備されていると見受けられる。</li> <li>●学校ウェブサイト、シラバスなどの情報を、パソコンのみならず、スマートフォンなどからも容易かつ使い勝手よくアクセスできるようにすることが望ましいが、その実情はどのようであろうか。</li> <li>●有効に活用されている。</li> </ul> |
| 8-2-①:<br>図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理され、有効に活用されているか。  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育研究上必要な資料が系統的に収集、整理され、有効に活用されている。</li> <li>●76,000冊を超える蔵書、各種データベースが整備され良く活用されている。</li> <li>●学生の要望等に基づいて、図書、学術雑誌等がよく収集され、よく活用されていることは理解できるが、なぜ「系統的」といえるのかが伝わってこない。</li> <li>●年間9,500冊以上の図書貸し出しがあり、図書購入に際し学生の要望が反映されるようになっているほか、ホームページによる新着図書の周知や、学外者への開放も実施している。</li> <li>●整備されている。</li> <li>●学外者の使用も可能で書籍も充実しています。整理されて、有効に活用されている。セキュリティーが問題の様子。</li> </ul>   |

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|---|--------------|---|
| 9-1-①:<br>教育の状況について、教育活動の実態を示すデータや資料が適切に収集・蓄積され、評価を適切に実施できる体制が整備されているか。                               | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育活動の資料は、PDCAサイクルの各段階ごとに教員に明示され、収集・蓄積されている。</li> <li>●卒業生の就職先、進学先及び近隣地域住民の評価、意見の他、発足した地域連携協力会会員の意見を取り入れる。</li> <li>●教育改善に向けた推進状況や、教育点検システム等についてよく理解できる。</li> <li>●P→D→C→Aの各段階毎に教員に明示されるとともに、収集・蓄積され、教育改善室と教務委員会との連携会議で評価を行っている。スパイラルアップを期待する。</li> <li>●授業改善推進室を中心に、教員のFD活動が行われている。これをさらに充実するために、関係教員間の連携組織を設けるなどして、複数教員間での意見交換やレベルアップを図るような仕組みもあってよいと思う。</li> <li>●データ・資料が良く収集・蓄積され、体制が整備されている。</li> </ul>     |
| 9-1-②:<br>学校の構成員及び学外関係者の意見の聴取が行なわれており、それらの結果をもとに教育の状況に関する自己点検・評価が、学校として策定した基準に基づいて、適切に行われているか。        | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学校構成員・学外関係者の意見の聴取がアンケート形式で行なわれている。それらの結果をもとに教育の状況に関する自己点検・評価が、策定した基準に基づいて適切に行われている。</li> <li>●各種の評価結果を教育の質の向上、改善に結びつける組織としてのシステムが整備されている。</li> <li>●点検評価の内容・方法・蓄積、及び評価者の選定等適切であると認識する。</li> <li>●アンケート等による学校の構成員及び学外関係者からの意見は毎年度、小山高専自己点検評価報告書としてまとめられており、公開されている。</li> <li>●継続的に意見聴取が行われていることを高く評価する。なお学外関係者に対するアンケートには、是非教育目標や教育方針に関する意見聴取も含めてほしい。</li> <li>●様々な角度から聴取されて折り、反映されている。</li> </ul>               |
| 9-1-③:<br>各種の評価の結果を教育の質の向上、改善に結び付けられるような組織としてのシステムが整備され、教育課程の見直し等の具体的なかつ継続的な方策が講じられているか。              | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育の質の向上、改善に結び付けられるシステムが整備され、教育課程の見直し等の具体的なかつ継続的な方策が講じられている。</li> <li>●教育改善推進室を中心に(学科会議と教務委員会を中心に)見直しが講じられている。</li> <li>●学科会議において、次年度の授業の在り方等について報告等がなされていることは理解できる。評価結果の中で「教育改善推進室を中心に……」とあるが、具体的な整備状況が見えてこない。</li> <li>●教育改善推進室を中心に整備され、学科会議と教務委員会を中心に教育課程の見直しなど具体的な継続的な方策を講じている。</li> <li>●組織的、継続的に取り組みが行われている。</li> <li>●外部からの評価を受け、アンケート等の報告も加えて改善致している。</li> </ul>   |
| 9-1-④:<br>個々の教員は、評価結果に基づいて、それぞれの質の向上を図るとともに、授業内容、教材、教授技術等の継続的改善を行っているか。また、個々の教員の改善活動状況を、学校として把握しているか。 | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●年度毎に各教員からFDアクションレポートが提出され継続的改善がなされており、改善活動状況を学校として把握されている。</li> <li>●授業評価アンケートの結果により質の向上をはかっている。</li> <li>●FDアクションレポートに基づいて個々の状況が把握できていることが理解できる。</li> <li>●個々の教員から前年度からの改善結果を含めたコメントを提出させ、授業内容等の改善を継続的に行っている。また、アンケートとコメントを報告書にまとめるほか、毎年度のFDアクションレポートにより改善を把握している。</li> <li>●FDアクションレポートは、素晴らしい取り組みと思う。</li> <li>●「教育改善推進室」を中心に、システムが整備されている。</li> </ul>   |
| 9-1-⑤:<br>研究活動が教育の質の改善に寄与しているか。   | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学生・教員による学外発表件数から研究活動が教育の質の改善に寄与していると読み取れる。</li> <li>●教員の学会での論文発表、生徒の学外に於ける研究発表は教育の質向上に寄与している。</li> <li>●研究の成果が「卒業研究」等に生かされていることは評価できる。また、現在、「表現力のある人間の育成」が求められているので、プレゼン能力の育成は時流にも合致している。</li> <li>●教員並びに学生の研究活動・発表は、小山高専のプレゼンスアップに寄与している。</li> <li>●教員の研究活動と学生の卒業研究や専攻科の特別研究とを同一のものとして捉えるのが適当かの判断はしかねる。</li> <li>●学科によってバラツキはあるようであるが、学生による学外発表から、研究の教育への反映が行われていることがわかる。</li> <li>●教育の質の改善に寄与している。</li> </ul> |
| 9-2-①:<br>ファカルティ・ディベロップメントが、適切な方法で実施され、組織として教育の質の向上や授業の改善に結びつけているか。                                   | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学内・学外のFD研修会参加、公開授業開催、授業見学アンケートの実施により、組織として教育の質の向上や授業の改善に結びつけている。</li> <li>●教員のFDと授業との間に時間的、意欲的齟齬はないか。</li> <li>●本学としてFDを通じた教育の質の向上を目指していることが窺え、そのことは教員の質の向上につながっているものと捉える。</li> <li>●各教員にFD年間計画表を配布し、多様なFD活動により、授業評価アンケートからも教育改善の成果が確認できる。</li> <li>●授業改善推進室を中心に、教員のFD活動が行われている。これをさらに充実するために、関係教員間の連携組織を設けるなどして、複数教員間での意見交換やレベルアップを図るような仕組みもあってよいと思う。</li> <li>●学外の研修会への参加が増えて、意識が高まっている。</li> </ul>           |

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|---|--------------|---|
| 9章<br>9-2-②:<br>教育支援者に対して、研修等、その資質の向上を図るための取組が適切に行われているか。           | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●事務職員・技術職員の学外研修会への参加、技術職員の学内研修会への参加などから、その資質の向上を図るための取組が適切に行われている。</li> <li>●地域連携共同開発センターの効果的な運用が求められる。</li> <li>●教育を支える学内の職員に対して、意識の共有化が図られるよう工夫されている様子がうかがえる。</li> <li>●学校内外の研修等により資質向上に努めている。</li> <li>●適切に行われている。</li> <li>●教育の質の向上や、授業の改善等に結びついている。</li> </ul>  |
| 10-1-①:<br>学校の目的に沿った教育研究活動を安定して遂行できる資産を有しているか。また、債務が過大ではないか。        | 4.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●学校の目的に沿った教育研究活動を安定して遂行できる資産を有している。債務も適切な額である。</li> <li>●財務状況に問題は無し。</li> <li>●債務がなく、資産の保有状況も明確になっており良好である。</li> <li>●安定的に遂行するための資産を保有している。また債務はない。</li> <li>●教育・研究に必要な資産を有している。債務はない。</li> <li>●財務状況は良好で有る。本校は休息地もなく、問題ない様子。</li> </ul>   |
| 10-1-②:<br>学校の目的に沿った教育研究活動を安定して遂行するための、経常的収入が継続的に確保されているか。          | 3.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●経常的収入が継続的に確保されている。しかし運営交付金の減額状況を考えると外部資金獲得がさらに望まれる。</li> <li>●外部資金の獲得が必要。</li> <li>●運営交付金が減額されるので、今後は、経営努力が求められる。</li> <li>●高専機構を通じ継続的に運営費交付金が毎年交付されているが、年々減額となっていることから、今まで以上に外部資金の獲得に努められたい。</li> <li>●本校のみの問題ではないが、運営費交付金の減額は極めて厳しい状況にあり、収入確保について、対策を考えなければならない。</li> <li>●適切に明示している。</li> </ul>  |
| 10-1-③:<br>学校の目的を達成するために、外部の財務資源の活用策を策定し、実行しているか。                   | 3.9          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●科学研究費補助事業、その他の助成事業の説明会を学内開催し、外部財源確保に努力している。</li> <li>●科学研究費助成事業、受託研究費、共同研究費、奨学寄附金等の外部資金の受け入れを図っている。</li> <li>●今後も、引き続き「補助金」や「奨学寄附金」の受け入れなどに努めてほしい。</li> <li>●外部資金獲得に努め、獲得している。</li> <li>●年度によって寄附金に高低があるのはやむを得ないものの、共同研究や受託研究に安定した収入獲得のための努力が求められるのではないかと。</li> <li>●外部資金獲得ための施策を策定、実行し、収入を確保しようと努力していることを認めるが、いかにせんそれ以上に運営費交付金の削減が大きいことが残念である。</li> <li>●校内の予算配分方針を定め、教育・研究活動に必要な経費を確保している。</li> </ul> |
| 10-2-①:<br>学校の目的を達成するための活動の財務上の基礎として、適切な収支に係る計画等が策定され、関係者に明示されているか。 | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切な収支に係る計画等が策定され、学内関係者に明示されている。</li> <li>●適切に明示されている。</li> <li>●予算委員会の方針に基づき、適正な執行に努め、関係者にもその内容が明示されていることが理解できる。</li> <li>●予算委員会において方針策定・承認がなされ、運営会議等を通じ、適切な執行依頼、計画の明示がされている。</li> <li>●予算配分について、十分検討され、重点配分をするなど工夫をしている。</li> <li>●規定通りに行われているようだが、機構本部での開示となるか、本校での閲覧は不可か？</li> </ul>   |
| 10-2-②:<br>収支の状況において、過大な支出超過となっていないか。                               | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●適切な収支の状況である。</li> <li>●過大な支出にはなっていない。</li> <li>●収支のバランスがとれ、過大な支出超過とはなっていない。</li> <li>●過大な支出超過に成っていない。</li> <li>●機構会計規則で定められた取扱いである以上、評価の仕様が無い。</li> <li>●適切に執行されている。</li> <li>●適切と考えられる。</li> </ul>   |
| 10-2-③:<br>学校の目的を達成するため、教育研究活動に対し適切な資源配分がなされているか。                   | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●校長裁量経費、重点配分経費が企画・実施され、適切な資源配分がなされている。</li> <li>●適切な予算配分がなされているか否かは学校運営上、重要な課題である。</li> <li>●予算配分方針に基づいてメリハリのついた配分がなされ、適切な教育活動が行われていると理解できる。</li> <li>●予算委員会、施設整備は、環境整備委員会で全校的な見地から効率的な配分をしている。</li> <li>●学科間の競争性を促すため重点配分等が機能することは理解するが、ボトムアップ型でのものに限らず、トップダウンで競争性を促すこともあっても良いのでは。</li> <li>●重点配分、校長裁量経費などにより、適切な配分となるよう工夫がなされている。</li> <li>●校内予算配分がなされ、教育研究活動に必要な経費を確保している。</li> </ul>                 |

| 評価項目  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|---|--------------|---|
| <p>10章</p> <p>10-3-①:<br/>学校を設置する法人の財務諸表等が適切な形で公表されているか。</p>                                    | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●独立行政法人国立高等専門学校機構の財務諸表等が適切な形で公表されている。</li> <li>●独立行政法人通則法に基づき会計監査人により会計監査が行われている。</li> <li>●会計規則に基づいて、適切な公表が行われていると理解できる。</li> <li>●所定の手続きに則って決算数値を確定し、高専機構として、翌事業年度5月末までに財務諸表を作成し公表している。</li> <li>●適切に行われている。</li> <li>●規程通り行われている。</li> </ul>  |
| <p>10-3-②:<br/>財務に対して、会計監査等が適正に行われているか。</p>   | 4.6          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●財務に対して、会計検査院・監査法人による会計監査等が適正に行われている。</li> <li>●一般の閲覧に供することができるか。</li> <li>●規則に基づいて、内部監査及び外部監査が行われていると理解する。</li> <li>●高専機構監査及び特に命令された教職員による内部監査、及び外部監査を実施している。</li> <li>●適切に行われている。</li> <li>●規則により行っている。</li> </ul>   |
| <p>11-1-①:<br/>学校の目的を達成するために、校長、各主事、委員会等の役割が明確になっており、校長のリーダーシップの下で、効果的な意思決定が行える態勢となっているか。</p>   | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●校長・副校長4名・事務部長・課長2名による管理運営体制が敷かれさらに学科長等を含めた運営会議が設置されており校長が最終判断を行える仕組みになっている。</li> <li>●効果的な意思決定が行われている。</li> <li>●各委員会や各会議の権限等が明確になっている。また、校長のリーダーシップのもとに運営会議が持たれていることや、各会議の改善の在り方が明確になっており評価できる。なお、各主事等の役割や職務内容などが規程で示されるとなおよび。</li> <li>●役割・権限は規定で明確に規定されている。</li> <li>●運営組織、委員会などは概ね適切であると思うが、業務の効率化、教職員の負担削減の観点から、委員会の統廃合の可能性も検討してはどうか。</li> <li>●役割が明確に成されており、学校長により効果的な意思決定が行われている。</li> </ul> |
| <p>11-1-②:<br/>管理運営の諸規定が整備され、各種委員会及び事務組織が適切に役割を分担し、効果的に活動しているか。また、危機管理に係る体制が整備されているか。</p>       | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●管理運営諸規定・危機管理要領が定められている。</li> <li>●CSR活動については要領が定められ危機に迅速かつ的確に対処している。</li> <li>●学内諸規定、要領等がよく整備されている。なお、評価結果の中に「共通の理解をもちながら効果的に・・・」とあるが、その根拠が見えてこない。</li> <li>●管理運営の諸規定は整備され、必要に応じ制定・改廃を行うなど見直しがなされている。危機管理についても、要領が定められ、リスク管理室を設置し対応している。</li> <li>●11-1-①でも述べたが、業務の効率化、教職員の負担削減の観点から、委員会の統廃合の可能性も検討してはどうか。委員会の趣旨と審議事項から見て、近い内容を取り扱っている委員会があるように見受けられる。</li> <li>●効果的に活動されている。</li> </ul>            |
| <p>11章</p> <p>11-2-①:<br/>自己点検・評価が学校として策定した基準に基づいて高等専門学校の活動の総合的な状況に対して行われ、かつ、その結果が公表されているか。</p> | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●点検評価規程に基づき、3年を越えない範囲で点検結果が纏められ、公表されている。</li> <li>●点検評価規定に基づき各実施主体が事項、点検項目毎に自己点検・評価を継続的に実施している。職員、学外者にも常時閲覧可能。</li> <li>●評価規程に基づき、適切な点検・評価及び公表が行われていると理解できる。</li> <li>●各実施主体が自己点検・評価を継続的に実施するとともに、結果は教職員への周知、ホームページに掲載し学外者も常時閲覧可能になっている。</li> <li>●自己点検評価が実施されていることは分かるが、その結果の公表については規程に定められておらず、公表方法等が不明確。</li> <li>●機関別認証評価、JABEE審査を含め、継続的に自己点検・評価が行われている。</li> <li>●規程により公表されている。</li> </ul>      |
| <p>11-2-②:<br/>自己点検・評価の結果について、外部有識者等による検証が実施されているか。</p>   | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●外部評価委員会規程が設けられ、検証が行われている。</li> <li>●規定により外部評価委員会が設置されその意見を学校運営に反映している。</li> <li>●規程に基づき適切に実施されている。</li> <li>●規定が整備され、外部評価委員会からの提言を管理運営に反映させている。</li> <li>●過去の外部評価による検証は、適切に行われていたと認める。</li> <li>●規程にて外部有識者等により検証が実施されている。</li> </ul>  |
| <p>11-2-③:<br/>評価結果がフィードバックされ、高等専門学校の目的の達成のための改善に結び付けられるようなシステムが整備され、有効に運営されているか。</p>           | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●運営会議・各委員会等において点検結果が検討され改善がなされている。</li> <li>●評価結果がフィードバックされ有効に運営されている。</li> <li>●「教育点検システム及び改善システム」の流れに沿って、適切に運営されていると理解できる。</li> <li>●各委員会等にフィードバックされている。</li> <li>●図解により流れは分かるが、その改善内容等の記述が無く、実態が把握できない。</li> <li>●教育点検システム、改善システムは概ね妥当な構成となっていると思われるが、自己点検・評価、外部評価などの結果の個々の事項がどの委員会などで検討されることとなるのか視覚化、図示しておくことで、対応の漏れや「評価のやりっぱなし」などを未然に防げるようにはならないか。</li> <li>●有効に運営されている。</li> </ul>             |

| 評価項目   | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|--|--------------|---|
| 11-3-①:<br>外部有識者等の意見や第三者評価の結果が適切な形で管理運営に反映されているか。                  | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●外部評価委員会の評価が関係委員会・運営会議に報告され改善に反映されている。</li> <li>●外部意見を取り入れる規定が整備されており、外部有識者の意見が適切に管理運営に反映されている。</li> <li>●評価結果が、反映されるシステムが構築されている。なお、今後、どのように改善に生かしたのかの公表等も視野に入れることも一考ではないか。</li> <li>●規定は整備されている。</li> <li>●反映されていると考える。</li> <li>●実施されて第三者評価が反映されている。</li> </ul>   |
| 11-3-②:<br>学校の目的を達成するために、外部の教育資源を積極的に活用しているか。                      | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●長岡技術大学との協働教育、宇都宮大学との協定、技術者育成道場、技術講演研修会など、外部資源を活用している。</li> <li>●宇都宮大学・長岡技術大学との交流、技術者育成道場による技術講演研修会の実施。</li> <li>●所期の目的を達成するために、積極的に外部の教育資源を活用しようとする方向性がうかがえる。</li> <li>●大学との協働教育の実施、交流・連携に関する協定書の締結及び企業技術者等による技術講演研修会が実施されている。</li> <li>●技術者育成のためには、今後は学校教育組織のみならず、産業界からの教育へのコミットメントが重要であり、技術者育成道場やインターンシップをさらに発展させ、学生が産業界や技術者と直接触れ合い、理解する機会を増進してほしい。</li> <li>●大変積極的に使用している。</li> </ul>  |
| 11-4-①:<br>高等専門学校における教育研究活動等の状況や、その活動の成果に関する情報を広くわかりやすく社会に発信しているか。 | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●積極的に教育研究活動等の状況が外部へ発信されている。</li> <li>●ホームページによる公開、先進的キャリア推進室の設置、地域連携協会の発足などにより広く発信できる。</li> <li>●教育成果や活動状況を広く発信していることが認識できる。</li> <li>●webへの掲載による公開、出前授業などを通じて、広く社会へ発信している。</li> <li>●十分行われていると考える。</li> <li>●オープンキャンパス・学校説明会・出前授業等、目線を低くして積極的に発信している。</li> </ul>  |
| 12-1-①:<br>高等専門学校の研究の目的に照らして、研究体制及び支援体制が適切に整備され、機能しているか。           | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●先進的キャリア教育推進室、教育コーディネーター、種々の変遷を経た地域連携共同開発センターが設置され機能している。</li> <li>●地域連携共同開発センターが中心になり有効に機能している。</li> <li>●研究活動に関する目標を明確にした上で、様々な取組を行い着実な研究成果をあげている。また、それらを、広く内外に発信するとともに、多彩な連携・交流にも取り組んでおり評価できる。</li> <li>●地域連携共同開発センターが中心となって支援を実施。24年度から全面改修を行っており地域連携の拠点としてより一層期待される。また22年度立ち上げた教育研究推進委員会により、全学のビジョンを持って外部競争的資金の獲得に取り組んでいる。更に23年度小山市と包括協定が締結された。</li> <li>●様々な機関の設置や取り組み、人材の配置がなされていて、体制づくりが出来ている。</li> <li>●共同センターやコーディネータの配置により、研究支援や産業界との共同研究が推進されている。なお一層の飛躍を図るために、研究シーズ集などに加えて、教員の研究分野・専門分野をさらに学外に浸透させる(広報する)ことや、産学交流会において、ポスター発表セッションの時間を長く取る等、産業界と教員の距離を縮める方策を考えてはいかかがか。</li> <li>●地域連携共同開発センターが中心と成って行っている。本校「協力会」も設立された。</li> </ul> |
| 12-1-②:<br>研究の目的に沿った活動の成果が上げられているか。                                | 4.3          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●研究の目的に沿った活動の成果がでている。</li> <li>●小山市との包括連携協定にかかる受託事業などは成果の一つ。</li> <li>●本校教員による様々な研究成果が認められ、教育への還元も良好である。また、地域との連携・協力も積極的であり、よく貢献している。</li> <li>●教員に論文・発表の他、学生の国内外での発表もあり、県内大学が集まる発表会でも優秀な成績を収めている。また、奨学寄附金、共同研究・受託研究、技術相談など地元企業との連携も進められている。</li> <li>●本校の性格上、産学連携は盛んに行われる範囲であるが、官学連携の拡大にも更に努めて頂きたい。</li> <li>●着実に成果を上げている。研究のための外部資金も獲得しているが、可能なら12-1-①と関連して、個々の教員が外部資金を獲得するための支援(たとえば科研費の説明会において、申請書の書き方の具体的なコツやヒントの伝授など)を考えてはいかかがか。</li> <li>●研究成果・論文発表等、件数が増えている。勉強会も多くなり、充実している。</li> </ul>   |

| 評価項目 |  | 平均評価点<br>(*) | 評価点の準拠理由や今後の改善に資するアドバイス等  |
|------|--|--------------|---|
| 12章  | 12-1-③:<br>研究活動等の実施状況や問題点を把握し、改善を図っていくための体制が整備され、機能しているか。                | 4.0          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●教育研究推進委員会が設置され、中国重慶大学、宇都宮大学、小山市との連携協定が締結されている。</li> <li>●改善の取り組みがなされている。</li> <li>●教員の研究活動を適切に把握した上で、学校体制として改善への取組が適切に行われている。</li> <li>●共同センター長を中心に研究組織・研究活動方針に改善が実施されている。</li> <li>●自己点検評価書の提出率が低い点は問題である。</li> <li>●改善は日々行われている。</li> </ul>   |
| 13章  | 13-1-①:<br>高等専門学校教育サービスの目的に照らして、公開講座等の正規課程の学生以外に対する教育サービスが計画的に実施されているか。  | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●公開講座等の正規課程の学生以外に対する教育サービスが計画的に実施されている。特にサテライトキャンパス設置後に件数は増加している。</li> <li>●計画的に実施されている。</li> <li>●本校の特色や、研究実績を生かして、小学生をはじめ積極的かつ計画的に、幅広い教育サービスを提供している。</li> <li>●出前講座・イベント等は増加している。サテライトキャンパスの開設や小山市内小学校への「理科教育支援プロジェクト」は有意義である。また、図書情報センターをはじめとして、施設の外部への開放がなされている。</li> <li>●高齢社会において生涯学習への意欲が大きくなる中で高専等の高度な学習機関に期待が寄せられていると思われるので、そうした者を対象とする講座の拡充を望みたい。</li> <li>●多くの活動が行われており評価できる。学外者に対するサービスの提供は、地域貢献、社会貢献としての意義のみでなく、本校に対する理解と親しみを涵養し、将来の受験生の増加にも寄与することが期待できる活動であり、今後とも継続していただきたい。なお参加者数が少ない(5名以下)公開講座もあることが気になるので、広報体制の点検も必要と思われる。</li> <li>●計画的に行われている。増えている。他高専後援会が出前授業の視察も行われた。(長岡)</li> </ul> |
|      | 13-1-②:<br>サービス享受者数やその満足度等から判断して、活動の成果が上がっているか。また、改善のためのシステムがあり、機能しているか。 | 4.4          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●公開講座・出前講座・図書情報センター活動のアンケート調査を行い、結果分析により次回以降の改善に繋げている。</li> <li>●アンケートの結果を見る限り成果が感じられる。</li> <li>●出前講座や公開講座では、その専門性を生かした内容が実施され、アンケートにもあるように多くの参加者からの絶大な支持がある。</li> <li>●利用者のアンケートによると満足度は高い。更に利活用が進み、地域との関係が深まることを期待する。</li> <li>●参加者からの意見聴取に際して、リピーターの把握や、近隣の人たちにも勧めたい／勧められて来た、など情報の広がりについても調査したり、本校入学生が、入学以前に本校の主催するイベントに参加したことがあるか、どう感じたか、なども調べることで、より効果が実感できるようになるのではないかと。</li> <li>●アンケート調査にて、高い満足度が示されている。成果は上がっていると思われる。</li> </ul>  |
| 14章  | 14:<br>小山高専中期計画の達成状況   | 4.1          | <ul style="list-style-type: none"> <li>●自己点検書からはいつからいつまでが中期計画年かは読み取れないが、年度毎の目標はほぼ達成されている。</li> <li>●概ね達成されている。</li> <li>●諸々の業績から概ね達成されていると理解している。</li> <li>●概ね達成されているものと思料。</li> <li>●継続となっている課題もあるが、概ね達成されていると言える。継続課題については今後の対応を期待する。</li> <li>●目標の達成計画を第三者評価者に報告頂きたい。</li> </ul>   |

## 参考資料

### 小山高専の沿革（概略）

## 《小山高専の教育目標》

### ■ 社会性豊かなひとづくり教育

→「技術者である前に人間であれ」(校訓)

### ■ 創造性ものづくり教育

→「先進技術・理解のための学際教育」(H21～)

→「教育コーディネータによる技術者育成道場」(H23～)

### ■ 中核的高等教育研究機関としての地域貢献

→「栃木市:サテライトキャンパス」(H22～)

(とちぎ歴史文化まちづくりセンター)

の設置・運営による情報発信と地域貢献の促進」

### <その他の特徴>

●学生の各種コンテスト、国際交流プログラムへの参加

## 【教育体制の更なる充実】

### 《専攻科の改組(H22～)》

◎複眼的視野を持つ「創造性技術者」教育の充実

→「複合工学専攻」(3専攻→1専攻)

### 《電気電子系2学科の統合・高度化再編》

◎新学科『電気電子創造工学科』の創設(H25～)

○キーワード:基礎学力の充実、先進性・創造性、国際性

○3コース制:「環境共生エネルギー」「制御システム」「情報デザイン」

○インテンシブ・イングリッシュ、電気電子英語、習熟度別授業

<JABEE(日本技術者教育認定機構)の継続受審>H22.10月

◎「複合工学系プログラム」工学(融合複合・新領域)分野

→評価は良好(「弱点」は無し)、6年間認定。

<長岡技術科学大学との「協働教育プログラム」(H23～)>

◎全国高専の内、6高専の学生(各10名)が対象

→国際性・複眼的視野・創造力・企画経営力等の育成

## 【教育に関する重点事項】

### 《入学志願者の確保》

- ◎茨城高専との合同入試説明会(筑西市):隔年で担当
- ◎説明会(25回)、オープンキャンパス(H25:2日間)、中学校訪問(170校)
- ◎本校校長・教務主事等による小山市内11中学校長の訪問
- ジュニア科学リーグ(中学1,2年)、キッズ・ユニバーシティおやま(小学生)
- ◎試験会場「本校会場」、「大宮会場」、「品川会場(7高専合同)」

### 《学習支援体制の強化》

- ◎学内での組織的「補習授業」の実施
- ◎保護者との信頼関係の強化(後援会支部会:14回/年)
- 「習熟度別授業」実施の準備

### 《「キャリア教育」を中心とするサポート体制の強化》

- ◎キャリア教育に関する各種講座の実施(先進的キャリア教育推進室)
- ◎メンタルヘルス関係の支援強化(担任・学生支援室・カウンセラーの連携)
- 交通安全・交通マナーに関する講習・指導(スクールバスの運行)

## 【入学者の状況・進路状況】

| 《入試倍率》 | H22年       | H23年 | H24年 | H25年 |
|--------|------------|------|------|------|
| 推薦選抜   | 2.4(3割→4割) | 2.3  | 2.0  | 2.5  |
| 学力選抜   | 2.0(7割→6割) | 2.0  | 1.9  | 2.3  |

| 就職(約50%) | H21年 | H22年 | H23年 | H24年 |
|----------|------|------|------|------|
| 求人倍率     | 24倍  | 22倍  | 20倍  | 21倍  |
| 就職率      | 100% | 99%  | 98%  | 98%  |

|          |  |
|----------|--|
| 進学(約50%) | H23年:計83名(推薦40), H24年:計90名(推薦44)                                   |
| H24(進学先) | 専攻科(24)、技科大(29)、宇大・農工大(7)、群馬大(5)<br>茨城大・千葉大(4)、筑波大(2)、新潟大・三重大、他(1) |
| 進学率      | H22年:99%、H23年:100%、H24年:100%                                       |

## 【平成25年度重点項目(小山高専)】

### 《他高専との連携》

- ◎『学生とユーザー・企業からなる開発コミュニティを活用した実践型エンジニアリング・デザイン教育』(H24年度～)  
(東京高専等との共同教育)

### 《国際交流プログラムへの参加》

- ◎『香港VTCとの交流:5月に21名の来校』(H26年度は訪問予定)
- ◎『海外インターンシップ(上海)、テマセク技術英語研修(シンガポール)、ISTSシンポジウム(香港)』の各々に、学生1名が参加

### 《学内での取組》

- ◎『教育コーディネーターによる技術者育成道場』  
(企業技術者等活用プログラム経費H23-25年度)  
→地域産業界との連携による新しいキャリア教育の実施
- ◎地域連携共同開発センターの改修(H24～H25年度)  
→地域貢献の拠点整備、共同研究の充実、キャリア道場
- ◎小山高専地域連携協力会—H25年9月設立

## 《国際交流プログラムへの積極的参加》



↑ ①香港VTCとの交流会② →

↓ ③海外インターンシップ(上海)

↓ ④テマセク技術英語研修(シンガポール)

OSG精密工具有限公司 (Shanghai)



仲間と異文化研修 (Singapore)

# 《「小山高専サテライト・キャンパス」の設置》

とちぎ歴史文化まちづくりセンター(栃木市倭町)

情報発信と地域貢献等の促進(H22-23年機構予算獲得)

## 活動内容

- ①ラウンジ(情報提供)  
地域紹介・まちづくり
- ②コンサルティング  
入試・求人・共同研究
- ③スタジオ・ギャラリー  
科学スタジオ・ハンドベル
- ④フォーラム  
ものづくり・歴史・文化財



[サテライト・キャンパスの建家とイベント例] ○全景(上)↑  
○スライムづくり実習(左)→  
○スーパーザウルス君(右)→

## 《学生の「各種コンテスト等」参加・受賞の例》



↑ ①ロボコン2012:ロボコン大賞  
↓ ③デザコン2013:優秀賞

↑ ②栃木県書写書道展 特賞  
↓ ④デザコン2013:



構造デザイン (Reinforce TriStar)

空間デザイン(みんなの街・私の庭)



空間デザイン  
(武勇～スポーツと酒)



## 【平成25年度、本校で実施のイベント等】

### 《高専体育大会》

- ◎バスケットボール「7/6(土),7(日)」栃木県立県南体育館
- ◎硬式テニス「7/13(土), 14(日)」小山運動公園テニスコート

## 【本校の将来計画】(高度化再編のプロセス)

### 《Step-1:専攻科の改組》(実施済み)

- ◎平成22年度:「専攻科1専攻」(複合工学専攻)への改組
- ◎複眼的視野、発展的創造力、自然・生命・社会・文化融合技術

### 《Step-2:電気電子創造工学科の創設》(H25. 4より実施中)

- ◎ジェネラリスト基盤を持つスペシャリストの育成
- ◎「地域のニーズ」「科学技術の発展」への対応

### 《Step-3:「国際交流センター」構想》(今後の方針)

- ◎短期留学生受け入れプログラム、国際交流フロア、留学生の受入れ倍増、集中英語講座講師の宿泊等に多目的活用

## む す び

本校における自己点検評価は平成4年度から開始し、今年度で7回目をむかえた。第5回目(平成19年度受審)からは機関別認証評価も受審することとなった。これにより点検評価書のひな形が明示されたが、必要とされる所謂「エビデンス」の量は膨大となり、準備する教職員の負担も大きくなると共に、外部評価委員の皆様へも相当なご負担をお掛けすることになった。

今回の外部評価委員は、十数高専における外部評価委員の実態を調査し、その結果を踏まえ、産官学の各界からその専門性や立場の多様性を考慮して、かつ適切な人数でご依頼することとした。

外部評価は、各項目5点満点である。ただし、評価基準・レベルは外部評価委員のそれぞれの判断におまかせした。この点において、外部評価委員の皆様を悩ませてしまったことは否めないが、結果的にはほとんどの項目について、概ね合格点をいただいたと理解している。

以下、外部評価委員の皆様から今後一層の充実を図るべき具体的事項として、次の点が挙げられた。

- 1) 「技術者である前に人間であれ」とする教育の基本理念の下、全人的な教育を目指し、しなやかかつ大胆な運営を期待していること。
- 2) 特定の科目に限らず、学際教育プログラムを様々な科目の中に取り入れること。
- 3) 技術者育成道場、サテライト・キャンパス、インターンシップ等を通じ、地域社会や産業界との連携を一層促進させ、教育に係わる地域連携の充実を図ること。
- 4) グローバル人材やコミュニケーション能力の育成において、工学面における図版、図面、グラフ、プログラムはコミュニケーションのツールであり、武器であることを学生に認識させ、国際的な舞台に立つ機会を設けること。
- 5) 教員の教育意欲の高揚に繋がる仕組みの構築を期待していること。

これらのご指摘内容には、今後数年から十年の間に取り組むべき改善課題として、本校教職員が常々認識していることも含まれており、喫緊の課題と中長期的課題とを精査整理し、全学的に周知し、速やかに取り組みを進めて参りたいと考えています。

最後に、たいへんご多忙中にもかかわらず本校の外部評価委員をお引き受けいただき、膨大な資料調査とヒアリング調査をもとに、的確な評価と小山高専の改善遂行への確かなる指標をご提示いただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

平成26年3月

点検評価委員会委員長  
副校長(総務主事) 糸井康彦

平成 2 5 年度 外部 評価 報告 書

平成 2 6 年 3 月 発行

発 行 小山工業高等専門学校  
〒323-0806 小山市大字中久喜 7 7 1 番地  
電 話 0285-20-2100 (代表)  
F A X 0285-20-2880

編 集 小山工業高等専門学校外部評価委員会